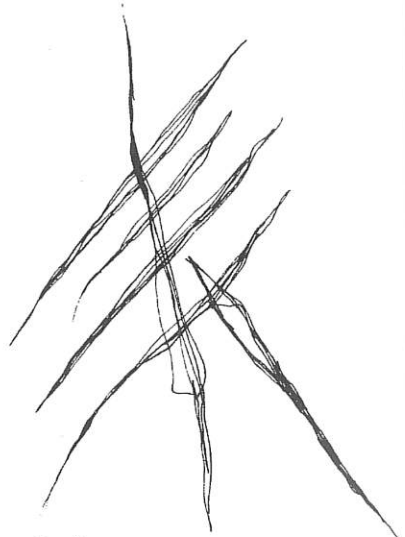


賀状



鈴木信一

1

薄ぼんやりした蛍光灯のもと、十ほどある机には書類や教材の山があつて、部屋の空気は相変わらず埃っぽかつた。私は真新しい教科書以外は何も置かれていない机をもう一度雑巾で拭いてから、流しに立った。そんな私を注視している人物が、部屋には一人いた。椅子の背に体をあずけた格好で、先ほどから何か言いたそうにしている。私は雑巾をゆすぎながら、次にどうすべきかを考えた。

「四十人でスタートしたクラスが、卒業時には半分以下に減る。まるで生き残りゲームですね」
 どうせならと思ひ、先手を打つてみた。浜田哲男は待つてたとばかりに、
 「夕方五時から九時まで。それを四年間。大変なのさ」

五分刻りの白頭を掻きながら、身を乗り出して

きた。定時制高校に勤めて二十年目になるという老教師は、いつものように色褪せた茶のコーデューロイジャケットを着ていた。よれたジャケットとは対照的に、相手を物色するような目だけは今日も健在だった。浜田のそんな眼差しを避けながら、私は言葉を継いだ。

「社会人であるぶん、彼らにははじめがあるだろうし、じつは定時制で良かったって思つてるんです」

「甘いなあ。社会人が夜間だけ高校生をやるんじゃないんだよ」

「……」

「逆だよ。高校生が昼間、仕方なしに社会人をやつてるんだ。勤労学生なんてのは昔の話さ。全日制に落ちた子、全日制を辞めさせられた子。集まつてるのはそういう連中なんだ」

四日前に辞令交付を受け、定時制勤務であることはそのときに告げられた。N高には、そう言えど各学年ひとクラス、計百名ほどが学ぶ定時制課

程が併設されていたのである。私は何の心の準備もないまま、その日のうちにこの埃っぽい部屋に案内された。定時制職員室は、校舎の隅に捨て置かれたような、薄汚れた部屋だった。

「でも、三十代と五十代の生徒がいるつて……」

「例外だよ。ほとんどが十代の子どもさ。本当なら勉強だけやつてりゃいい時代だつていうのに、昼間は無理に働いてるんだ。歪みも出るわけさ」

「……」

「給料のほとんどを、全日制の生徒が持てないものにつぎ込むなんていうのがそれだよ」

「持てないもの？」

「久保さん、分からない？」

浜田の口癖だった。そんなことも知らないのかと言わんばかりに驚いてみせ、答えにもつたいをつけるのだ。

「見当もつきませんが」

「全日制の子が持てないものといつたら、車くるましか

ないでしょ」

「そう言えば、車での通学は認められてるんですよね」

「車はいけないと思う?」

「自分の金で買うんだろうし、だいいち免許がないと働けない職場もあるわけですから、しょうがないとは思いますが……」

「そうじゃないよ。コンプレックスの反動としてのバイクや車。それが在り方の問題としてどうかってことだよ」

前任者から引き継いだ机の掃除を済ませたところで、こんどは来週から始まる授業の準備をするつもりだった。が、このままではそれもできなくなるだろう。浜田はこのあと例によって持論をまくし立て、何度も「分からない?」を連発するのである。

浜田は、春休みだというのに毎日学校に現れた。そして私をつかまえては、議論をふっかけた。「分からない?」と言われるのが嫌で、むきになって応答しているうちに、最後にはもつと嫌な思いをした。昨日は、持ち込んだ段ボール箱の中身を見られたばかりに、昼飯を食いそびれている。

「そんな小難しい本揃えて何しようっていうの? ここは定時制だよ。言っとくけど、開くのは教科書じゃないからね。分からない?」

段ボール箱の梱包を解いたところでいきなり言われた。「久保祐司という人間だよ。それを見開きにするところから定時制教育は始まるんだ」

浜田は言ったあと、形式が無力であることを説き、一方でモラルの必要を説いた。形式とモラル

は同じではないか。私が口を滑らせて話はこじれた。浜田は、私の一に対して、十の割で話し続けた。浜田から解放されたとき、温めておいたコンビニ弁当は冷たくなっていった。私は、弁当をこれ見よがしに鞆に戻した。何を勘違いしたのか、浜田はまた話し始めた。

「徒然草?」 いらないね。だいいち、久保さん自身、本当に面白いの? こんな読んで」

「私が面白くなくても、生徒には教養として……」

「だから、それが形式だって言ってるの。俺は数学だけど、四則計算と一次方程式しかやらないよ。一年間で百万円貯めたい。今、手元に二十八万円ある。毎月いくら貯金すればいいか。それが分かれば十分でしょう。もう一度言っておくけど、モラルってのは譲れない道のこと。形式とはまるで正反対のものだからね」

連日この調子だった。もう沢山だと思って、今日は出勤の時間をずらした。ところが、まるで待ち合わせたように、浜田も四時過ぎに学校に現れたのだった。

「コンプレックスの反動としてのバイクや車」……、「在り方の問題」……、ですか……」

結局答えを曖昧にしたまま、私は帰り支度を始めた。今日こそはすすり鉢の底から引き返すつもりだった。教科書を鞆につめ、上着を手にして顔を上げたとき、自分と目が合った。闇を背にした窓ガラスは全面が鏡になっていて、職員室をそのまま映し出していた。職員室と、そこに立つ青年教師。まるで作りものの撮影セットだと思っただけだ。

撮影セットのドアが開いて、役者が一人現れた。「おっはよお!」 せんせー待ったあ?」

登場したのは、頭を坊主刈りにしたうえ、その毛を真っ赤に染めた女の子だった。派手な横縞シャツに、だぶだぶのジーンズ。耳にはピアスの代わりに安全ピンが刺してあった。

「茜、遅いよ。五時半の約束だろうが」

「だってシヤンプーだけの客だから、やってくれて店長に言われちゃったんだもん」

「退学願いは持ってきたんだろうなあ」

浜田は椅子から立ち、応接用のソファに移った。茜と呼ばれた子は、肩から斜めに下げた布製のカバンから、くしゃくしゃの紙切れを引っ張り出した。

「いまは勉強やる気ないんだから、仕事に専念するんだな。給料が上がっていいじゃないか。やっぱり金はいいよ」

「この人だあれ?」

振り返って、遠慮のない視線を私に向けながら、茜もソファに腰を下ろした。

「新しく赴任された久保祐司先生だ。お前が今回単位を落とした国語が専門だ」

「え? それじゃあ、松崎、転勤?」

「そうだ、松崎先生はM高にご転任だ」

「ざけんなよ! あいつのせいで退学になったんだからな。サラうぞ、あのやろ!」

茜が突然大声を出した。顔つきが一瞬にして変わり、茜はソファのテーブルを蹴飛ばした。

「うるせえ! お前がサボったんだろが!」

こんどは浜田が吠えた。茜は負けていなかった。

「だって、先生まだ来てねえもん」

洪々腰を上げる者もいたが、そう言い放ったまま動かない連中が三人ほどいた。一番図体の大きいのが、私を舐めるように見ている。視線がぶつかったときだった。

「先生、新任?」

飛び出したのは、愛嬌の混じった幼い声だった。私は拍子抜けして、相手を見た。パーマのとれかけた髪と、煤で汚れた頬。が、それは間違いで、煤だと思つたものは、よく見ると手入れのされていない産毛だった。テイ・ベア。そう言つては褒めすぎだが、要はぐうたらな熊の風情だった。

「二年生の教室はこの奥だよ」

質問に答える代わりにそう尋ねた。すると、残りの二人が同時に破顔し、不敵な笑みを浮かべた。熊もにやりと笑って、

「だいたいあたしは辞めるなんてひとも言つてねえんだぞ。そっちが勝手に辞めさせるんだろ。単位一個しか落としてねえのに辞めろって言ったのはてめえだろ!」

「じゃあ聞くが、お前、四十五分間机に座つてられるのか。遅刻しないで学校に来られるのか」

「だから、やるって言ったろ。それをそっちが信じねえんじゃねえかよ!」

「同じこと、これまで何回俺に言ったか覚えてる? 分からない? 三回だよ、三回!」

浜田がまた声を張り上げた。茜はしばらくのあいだ浜田と睨み合った。そして何事かを喚き散らしながら、職員室を出ていった。私は窓へ向いた。外を眺めるふりをして、窓ガラスに映る浜田を盗み見た。浜田は、茜を見送った姿勢のまま、しばらく動かなかつた。やつと腰を上げたとき、

「大丈夫、あいつはまた戻ってくる」
 そうつぶやいた。先ほどの剣幕が嘘のような、小さな声だった。
 「戻るって、今夜また学校に来るってことですか?」
 振り向きざまに言うと、
 「違うよ。久保さん、分からない?」
 浜田はたちまち、いつもの口調に戻った。
 「復学だよ。来年の入学試験をやつは受けるのさ。でもまた辞めるだろうなあ」
 「辞めた生徒が、また同じ学校に入学……:ですか?」
 「いいんじゃない? 本当に勉強したいなら」
 気のない返事をする、私にはもう関心がなくなっているように、こんどは浜田のほうで帰り支度

を始めた。そしてそそくさと職員室を出てしまった。

「茜はおとなしいほうだからね。いい子もたくさんいるけど、危ないやつは本当に危ない。さつき定時制で良かったって言ったけど、それを言うのは、まだ早いかもよ」

帰りしなに浜田が言った言葉だった。蟻地獄の主は、気味の悪いハサミだけを残して、私をすすり鉢の底に置き去りにしたのである。

三時限目のチャイムが鳴った。
 「いよいよ初陣だね」

同僚の一人に茶化されながら、職員室を出た。定時制最初の授業は、二年生の古典だった。

階段の踊り場に達したとき、一度足を止めた。窓が開いていて、沈丁花の香りがそこまで届いていたからだ。私は窓外に顔を突き出した。沈丁

花は闇の中で一層強く芳香を放っていた。春という季節柄か、つんとする香りはいかにも再生という言葉と結びついた。私はもう一度沈丁花の香りを胸に満ちし、再び階段をのぼり始めた。

照度の落ちた蛍光灯が廊下をぼんやり照らす中に、まばらな人影があった。目が一斉に動き、突

如現れた新顔をとらえる。私はその視線に射抜かれながら、人影に近づいていった。職場から直行したと見え、いずれも仕事着のままである。その襟をはだけて、五、六人の生徒が道をふさぐように座り込んでいた。

「チャイムは鳴ったぞ。教室に入りなさい」

「てめえ、サラうぞ……コラー！」

人を脅すには一本調子ではだめなのだろう。岡田金作は声を落としたかと思うと、次は声を荒げた。抑揚のきいた脅し文句が続いた。

「やる気がねえ」だ？ あんた、誰？ てめえ、何者だ！」

背の低いほうではない私を見下ろす形で、金作が顔を近づけてきた。四十五度に前傾した眼鏡は、パンチパーマとともに金作の目つきを一層悪く見せ、そのフレームは私の鼻先数センチのところにあった。

顔を至近距離に握えることは、相手を威嚇すると同時に、相手の動きを封じる効果もあることを、金作は経験から知っているようだった。実際、私は目こそ決して逸らさなかったが、足は床に根を生やしたようになっていた。

後ろのドア付近で睨み合う二人。その声だけが、先ほどから静まりかえった教室にこだましていた。金作が次にどう動くか。予測できないこと

の不安が、私にまた言わせた。

「わざわざ金払って高校に来てるんだらう。やる気がないんなら、さっさと辞めちまえ！」

言った瞬間、金作が胸ぐらを掴み上げてきた。「おらあ！ 上等だ、てめえ！」

身体が床から引きはがされた。あごに食い込む金作の分厚い手を捻り上げようとした。動かなかった。

「そうだ、お前よりは上等な生き物だ！」

かろうじて胸ぐらを掴み返しなが、私は自分を傍観するもう一人の自分がいることを知っ

た。

尋ねたところで、職員室に唯一残っていた社会科の湯沢が、はす向かいの机から書類や教材の山を縫って首を伸ばしてきた。

「金作はあれで結構見所のあるやつだよ。何度も謹慎くらつてるから、あとがないけど」

湯沢道夫は、私より二つ年上で、定時制では私の次に若かった。春休みには浜田ほどではないが、ときどき学校に姿を見せ、文具の在りかや印刷室の使い方を教えてくれた。

「そんなに色々やらかしてらるんですか」

「暴力行為が二回と、教師への暴言が三回だったかな」

私は金作との一件を公にはしていなかった。だが、湯沢には打ち明けてみた。

「今の話、対教師暴力だなんて取り上げないで下さいね。カッコ悪いですから」

「いや、久保さんの勝ちだよ」

「勝ち？」

「そう。逆はあつても、金作が教室出ていくんが、なかつたもの。そうだよな」

湯沢は、卓也に相槌を求めた。

「そういえば金作が教室出たのって、はじめてだね。桜井とかいう英語の若い女の先生。金作に泣かされて、教室を飛び出したことがあったし……、そうそう、ここだけの話だけど理科の田島

なんか金作に暴言ビシバシ吐かれて、そのつど怒ったふりして授業放棄するんだけど、あれって、単にビビってるだけだよ。あの人、大学生の息

子がいるんでしょ、だらしねえよなあ。どうせなら桜井みたいにいさぎよく教員なんか辞めちゃえばいいんだ」

賀 状

た。新米教師が、教室で不良学生に胸ぐらを掴まれてる。この出来過ぎた絵を、クラス全員が見守っている。興味深げにほおづえを突いて眺める者。薄笑みを浮かべる者。迷惑そうに半身だけよ

じって睨みつけている者。もう一人の自分はそれを俯瞰しながら、この記念すべき最初の授業のゆくえを見守っていた。

「手を出したのはお前が、先だからな」

ふと我に返ったとき、口を衝いたのはそんな言葉だった。私は最後の部分に力を込め、金作をま

っすぐに見た。が、身体を引きずり上げられた時点で、教師の威信はすでに地に落ちている。私は自分の言葉に何も期待していなかった。そもそも、

どっちが先にぶつたかという幼稚な発想でしかないのだ。ところが意外にも、金作は突き飛ばすようにして私の胸元から手を離れた。

「忘れんな。いつかサラうてやっかん」

凄んだ金作は、一旦離れた身体をまた寄せてきた。取まりがつかないというように、こんどは立

ったまま貧乏揺すりを始めた。私は咳込みそうになるのをこらえながら、ネクタイを緩めた。視線

だけは決してはずさなかった。目を逸らせば、噛み殺される。金作と対峙した瞬間から、そう直感

していた。横断歩道では必ず手を挙げる幼児のような忠実さで、私は金作の目を睨み続けた。

二人の声がいったん止んだ教室は、音一つしなかった。どれほど経つたろうか。金作が目の前の

机を蹴り倒した。静寂が再び碎かれると、金作は直後、聞き取れない怒声を上げて、教室を出てい

った。

「とにかく、久保さんは自分の信じる通りにやることだよ。金作は根っからのワルじゃないから大丈夫」

「でも、やつはあの日から私の授業だけをねらつてポイコットしてるんですよ。山内健太と一緒に」

「だから、勝ちだつて言ってるの。久保さんを潰す気なら、授業に出たうえで謹慎すればいい授業妨害をするはずでしょ？ 金作は久保さんに気後れしてるのさ」

「でも、『手を出したのはお前が先だ』みたいなことを言ったから、退学を恐れて手を離れたわけ

でしょ？ ラッキーってそういうことでしょう？」

偶然言わなかったら、やつは暴走してましたよ」

「浜田先生なんか、金作の属性から悪ははずせない、なんてひどいことを言うんだけど、やつは

変われるよ。だってあの手の連中の中にあつて、金作だけなんだけ、タバコを手にしないのは」

金作の謹慎項目の中に「喫煙」がないこと。

一年生のある日ぶつりとタバコを止めてしまったこと。そのわけを聞いてもはつきりとは答えな

いこと。湯沢はこれらのことを私に話した。そして部活動を見てくると言つて職員室を出てしま

った。

湯沢がいなくなると、仮にも教師と生徒、卓也とのあいだには気まずい空気が流れた。何かを察

したのでらう。

「先生大丈夫、ここでの話は内緒にしておくからさ」

卓也はそう言うと、自分も用があるからといつて職員室を出ていった。大人びてはみるものの、

3

職員室に年中入り浸つてる生徒がいた。太田卓也という小柄な二年生である。生徒会の副会長をしているという。

「あれは先生が悪いよ。金作に恥かかせたんだから。でも先生ラッキーだったね」

事件から一週間ほど経つた放課後、職員室に現れた卓也は、唐突に切り出した。

「喧嘩は向こうが売ってきたんだぜ。何回名前呼んだと思う？ 後ろの山内健太としゃべりつばなしで振り向きもしなかった。あれはいわゆるシカトだろ？」

私が応じると、卓也は肩をすくめるようなポーズを取った。

「でも、『儲かりそうな名前だなあ』はないよ、先生。それに、金作は先生を試したんだ。いきなりシカト。これ以上うまい教師の測り方はないから」

「測り方？ 何を測るんだ」

「教師の、人間としての心の振幅って言うか……まあ、車で言えばハンドルの遊びだよ」

「で、俺は？」

「まあまあじゃない？ 遊びは大き過ぎても、小さ過ぎてもいけないわけだから。心配ないよ。金作は先生をサラうたりしないから」

「サラう」というのは彼らの隠語で、拉致して殺すというような意味であることは、理科の田島から教わったばかりだった。

「ところで、さつき『ラッキー』って言ったよね……、どういうこと？」

どこかに不完全さが残っていて、それがこの小柄な生徒をよけいに幼く見せた。口外しようにも、卓也にはそれを話す友人がいないことを、私は知っていた。

4

オレンジ色の電球が、金魚すくいに興じる金作と健太の顔を、柔らかに照らしていた。参道は浴衣姿で賑わい、焼きそばやカルメ焼き、ヨーヨーやお面などの露店が華やかに軒を連ねている。

「センセーもやってみなよ。案外難しいよ、これ」

すくい網を使い果たした健太が、私を見上げて笑みを浮かべた。

「それにしても、金作の集中力は怖いほどだなあ。網、一枚も壊してないんだらう？」

「金作さんこう見えてもほら、繊細だから」

「うるせんだよ！ 余計なこと言うから破れちまつたじゃねえかよ」

金作が網で健太を小突いた。

光泉寺の盆踊りに行こうと言い出したのは健太だった。

「小さいころ親父とよく行ったんだよ。露店の数がハンパじゃないんだ」

そう言つて、夏休みに入る前、三人で行くことを健太はあっさり決めてしまった。健太には母親と、年の離れた妹がいた。父親は航海士で、一年の大半を海上で過ごす。中学に上がつてからは、父親と話したことはほとんどないという。健太は

21

20

飯能の、金作と同じ中学校を出ていて、金作の一年後輩に当たった。中学時代は目立つほうではなく、金作ほどの悪さもしなかったが、「指導困難」という申し送りがあったのはむしろ健太のほうだった。

出欠確認の際、いくら呼びかけてもシカトを決め込む金作の席まで行って、

「お前、やる気ねえんだろ」

と最初に攻撃を仕掛けたのは私だった。

「なんだ？ てめえ」

先に反応したのが、金作の後ろに座っていた健太だった。

「やる気があるんなら、出欠を取ってるんだ、返事ぐらいいしろ。いい名前があるんだろう」

スタートでの気負いが、私を強気にさせた。健太を無視して、金作に詰め寄った。しかし、機微を察する眼力も、場数も、私には不足していた。

やおら立ち上がって直後金作が牙を剥いたとき、次に講じる手立てを、私は持っていなかった。

健太は金作の背後にいて、伸ばした前髪の奥から終始狼の目を覗かせていた。金作のそれよりも人を怖じさせるものが健太の瞳には宿っていて、

あのとき足が動かなかったのは、健太のせいではないかと思うこともあった。金作が教室から出ていくと、健太は私に顔を寄せてきて、「調子にのってんじやねえぞ」耳元でそう囁いた。そしてすぐさま金作を追ったのだった。

夏までの四ヶ月間、私はエネルギーの大半を、金作と健太に注ぐことになった。二人は出席時数が不足するのを恐れて、私の授業に出るようになった。が、健太があらゆる授業妨害を始めた。

生徒との飲み会の席でそう言ったのは、例によつて浜田だった。

「センセは、いまの仕事満足してんのか？」

泡を手で拭きながら、金作が無造作に言った。うつむきがちにして目を合わせない金作に真剣なものを感じて、すぐには言葉が出なかった。

「うーん、始まったばかりだからなあ。ああいうスタートを切っていなければなあ……」

心とは裏腹に、私は皮肉を言ってみた。金作は応じなかった。

「俺は何になるんかなー」

つぶやいて、金作は足元の石を踏みつけた。人に使われるのが嫌で、金作はアルバイトすらしたことがなかった。

「先輩、やー公だけは勘弁してくださいよ。先輩がなったら怖すぎますから」

健太がちゃちゃを入れた。と、そのとき、遠くに何かを捕らえて、健太が視線をある一点に定めた。あつという間に笑みが消えた。

「待っててくださいいね。礼儀知らねえのがいるんで、ちょっとシメてきますから」

唐突に言つて、健太は立ち上がった。金作が鋭く反応し、呼び止めた。健太はそれを無視した。

パーカーのフードを頭にかぶせ、サンダルを音でわざと鳴らしながら、踊りの輪に進んでいった。その背中は浴衣の群れに紛れて、やがて見えなくなった。

輪の反対側の露店の陰に、こちらを盗み見る二、三人の人影を見た気がした。が、人影は踊りの輪に隠れたと思つたら、次の瞬間には消えていた。

前の席の金作に向けて、私語を繰り返すのだ。健太の関心は、金作にはなく私にあった。

私は一度だけ金作に頭を下げた。廊下で金作をつかまえて、一方的に謝った。名前について押さたりはしなかった。名前について押さたりはしなかった。名前について押さたりはしなかった。

私に謝った。だが、金作はいまにも襲つてきそうに、剥き出しの敵意を示した。

「つせーな。てめ、うぜえんだよ」

言いながら、金作は振り上げそうになる拳を無理やりポケットに押し込めていたようだった。関係は修復されるどころか、悪化した。私はすれ違つた。教室では私を徹底的に無視した金作は、教室から一歩出ると、たとえ遠くからでも睨みつけてきた。

うさねながらも私が守り続けたことは、やはり相手から目を逸らさないということだった。

重い扉が開かれたのは、一ヶ月経ち、二ヶ月経つた頃だった。ある日、金作が授業中にはじめてノートを開き、黒板の字を写し始めたのである。分厚い手の中で、鉛筆は不器用に動き、その動きに応じて金作の表情から険が取れていくのが分かった。

金作の軟化は、健太を変えた。健太は金作を真似てノートを開き、これまた不器用そうに鉛筆を動かした。ふとした瞬間に、笑顔も見せるようになった。その表情は、驚くほど幼いものだった。

「やっぱカッコ悪いよ。男三人つてのは」

金作が言った。

「センセ、健太危ねえよ。あいつだけは、俺、分かんねえんだ」

金作は様子を見てくると言つてテントを出た。取り残された私は、あらためて無力感に襲われた。この頃では色々なことを話してくれるようになり、心を許すようになったが、二人は依然として私の知らない世界に生きていた。

金作は放課後になれば、正確には私と二人つきりになれば、驚くほど素直な表情を見せた。無理に誘つた喫茶店で金作がはじめて笑顔を見せたとき、きれいな歯と柔和な瞳に、私は見とれたほどだった。ところが、級友を前にすると金作は狂犬と化した。前日、二人きりのときには笑顔さえ振りまいた金作が、明るく日の授業では私に食つてかかるということが何度もあった。

「人間って他人の期待通りに動くことするんだよね。他人の視線がある種の呪縛になつてるんだ」

金作の振る舞いを評してそう言ったのは湯沢だった。

金作は新宿で生まれた。作業着や軍手売る店を営む父親と、病弱な母親。そして、三つ年上の姉がいた。気力と体力で店を大きくした父親は、しかし極道上がりということもあって、仕事仲間からは疎んじられていた。その反動からか、父親はわが子の教育に心血を注いだ。と言つても、それは多くの習い事を強制的にやらせるという、いかにも単純な方法だった。水泳、馬術、剣道。書道、珠算、ピアノ。

「それ以外にバイオリンとテニス？ おまえが？」

露店の並ぶ参道を、人混みに揉まれながら進んだ。三人を振り返って見る者、はじめから避けていく者があった。見ず知らずの若者が、「チース」と言つて頭を下げていく場面もあった。金作はそれらをことごとく無視した。金作は金の刺繍の入った紫のサマーセーターに、黒のストラックスという身なりだった。

「カッコ悪い」は、俺のせりふだよ。おまえのファッションどうにかしろよ、金作。みんな避けてくじやないか」

私が言うと、健太が割って入った。

「あつ、そんなこと言えちゃうわけ？ センセーこそ益踊りにスワツツっていうのやめてよ」

金作は取り合おうとはせず、ただ眉間に皺を寄せただけだった。

境内の櫓が見えてきた。紅白幕の中では、子供が太鼓を叩き、若い衆がそれを見守っていた。お囃子が聞こえていたが、太鼓以外は、テープによるものだと分かった。そのテープが不自然な途切れ方をして、曲が〈東京音頭〉に変わったとき、視界が一気に開けた。踊りの輪が大きく櫓を囲んでおり、その輪をさらに囲む形で、ここでも露店が軒を連ねていた。

テントの下にテーブルと椅子を用意した店を見つけて、私はビールを三つ注文した。生徒と酒を飲むことが、定時制では日常的にあり、私もそんな習慣を受け入れるようになっていた。

「久保さんだって、大学時代には飲んでたんですよ。十九歳かそこらで。こいつらは昼間働いてるんだから久保さんよりはましでしょ。こんなところで建て前を言つてもしょうがないの」

喫茶店で金作から聞かされたとき、私は吹き出してしまった。肩間に深い皺を作る、人を威嚇するようないつもの顔で言うものだからよけいにおかしかった。

「しょうがねえだろ。向こうは日本刀持ってたんだからよ」

日本刀を突きつけて習い事を強いる親なんかいるのか。私が言つても、本当のことだから笑えねえと、金作は表情を変えなかった。

金作は自分の名前が嫌だった。父親の野心が、自分の名前にまで託された。おかげで人生がねじ曲がった。金作はそう言った。父親に最初に背を向けたのは、姉の広美だった。中学に上がると不良グループに加わり、家の金を持ち出して、歌舞伎町界隈を夜な夜な遊び歩いた。金作はトンネルの出口を姉の中に見出し、あとに続いた。金作が髪を染め、タバコを覚えたのは、小学校五年生の夏だった。

子供たちの変貌にうろたえたのは、母親ではなく父親のほうだった。父親は矛先を母親へと向け、母親を毎日のように打ち据えた。そしてそのたびに姉弟は更生を誓い合つたはずだった。が、広美がシンナーを覚えたことで事態は悪化した。父親が、母親に日本刀を振り下ろしたのである。刃先は箆に当たって、幸い母親を傷つけるには至らなかったが、これをきっかけに母親は子供二人を連れて家を出た。飛び乗った電車を一回乗り換え、なおも遠くへと向かった先が、飯能だった。

金作は土地の中学に進んで、姉の広美は働き始めた。ところが、広美の派手な振る舞いは、狭い土地でおのずと噂になり、ついには暴走族（ナイ

賀 状

賀 状

賀 状

賀 状

賀 状

賀 状

賀 状

賀 状

賀 状

賀 状

トブラック)に引き抜かれた。広美が(ナイトブラック)の頭をつとめる田崎光一と恋仲になったのをきっかけに、金作もメンバーに加わった。中学二年生のときだった。素行の悪さに拍車がかかった。上級生が金作に媚びるようになり、教師も距離を置くようになった。

「教室にいた記憶なんかねえよ。気に入らねえやつを授業中呼び出して片っ端からぶん殴ってたか、せいぜい廊下を練り歩いて授業妨害してたか……、それぐらいしか覚えてねえよ」

「ひどい話だな。先生方の苦衷を察するよ」

「クチュウ? 分かんねえよ。難しい言葉使うなよ」

「苦しい心の内、つてことさ」

「苦しいことなんかあるもんか。タバコ吸ってたって注意するどころか、灰皿寄こすんだぜ。せめて吸い殻は灰皿に捨てるだよ」

「火事を心配するのさ。だいいち、注意したらタバコは止めたつていうのか」

「止めるわけねえだろ。殴っちまうよ」

「そう言ええ、いまは吸ってないんだつてな」

「どうしてやめたんだ」

「関係ねえよ」

「体でもこわしたのか」

「うるせえよ。いいじゃねえかよ」

「よかないよ」

「いいから、それより早く結婚でもしろよ」

「こんなふうに変化して終わるのが常だった。だが、金作がそうしなかったことが一度だけあった。それは、金作が定時制に入るまでのいきさつを語

るようになる。「定時制は秋が早い」とは同僚の言葉であるが、夜風と過ごす時間が長いぶん、みな季節の移ろいには敏感なのである。

「やがて正門をくぐり、玄関を抜けて、職員室への廊下を進んだ。気配は何も感じなかった。それを感じたのは職員室のドアを開けたときだった。職員がみな立ち上がっていて、騒々しいやり取りの中には怒声が交じっていた。健太が人を刺した。そして逮捕された。同僚の一人に聞いて事情を飲み込んだ私は、すぐに嫌な予感にとらわれた。

「だから金作は現場にいなかったつて言ってるじゃないですか。さつき電話で本人に確認したんです」

「濱田にかみついていたのは、湯沢だった。」「相手は中学生で、健太の後輩なんだろう? 分からない? 金作が一枚噛んでないわけじゃないやない。金作には俺が本当のことを言わせるよ。それより誰か警察で話を聞いてきてくれ」

「教頭と担任の西田先生が行きました。昨日の今日ですから警察は何も言わんでしょうけど……。健太のそこは親がダメだから、保護観察では済まんでしょうな。『願い』はすぐに出させますか、濱田先生」

「回っていない換気扇の下でタバコを吸いながら、田島が言った。濱田は答えなかった。」「湯沢さんは優しいね。でもね、金作は別格だよ。一対一だったり、学校というところでもつき合いようはある。でも、学校を離れたら駄目さ。悪はやつの習慣だよ。計算もするし、嘘もつく。久保さんには悪いけど、金作とのつき合いは

状

つたときだった。

中学卒業後、金作は当然のことながら進学も就職もしなかった。そして半年後、九月の終わりに事故は起きた。週末の夜、(ナイトブラック)の集会があつて、数百台の改造車と改造バイクが、爆音と奇声を上げた。そこへ、警察の奇襲が入つたのである。蜘蛛の子を散らした中に、金作の乗つたバイクがあつた。

「金作はこの日めつたにしないことをやめた。いつもなら低速蛇行でパトカーを牽制し、最後には路地へ逃げ込むところを、この日は、時速百キロの逃走劇を演じたのである。夜の国道を金作のバイクとパトカーだけが疾走する。前方に秩父連峰の黒い輪郭を認めたとき、空だと思つていた部分がついて泣きじゃくる母親のものであった。金作の言葉を借りれば「夢から醒めたようだった」。翌春、生きるの母のためと心に決め、金作は定時制の門を叩いた。

「生きるの母のため、か。かつこいいなあ」

「私が茶化しても、金作は表情を変えなかった。前傾した趣味の悪い眼鏡をはずし、脛を手のひらで擦つた。まるで髪の毛がまだ喉に絡みついているとでもいうように。」

「高校なんか来たかええよ。ただ、お袋なら何を望むか考えたらこうなつちまつたんだよ」

「口調は乱暴だったが、瞳は穏やかだった。事故がきっかけで変わったことは、ほかにもあ

り、私に存在に気づき、濱田は話を途中から私に振つてきた。湯沢が拳を机に突き立てたまま言つた。

「それでいいじゃないですか。知らないつてことは大事なんです。過去を問うことは、今日の金作を知る手がかりにはなつても、明日の金作を築くには障害となる場合が多いんです。自分を知らない人間から、金作は新しい評価をたくさん受けるべきなんだ」

「甘いなあ。『騙されることも大事だ』なんていうのと同じで、そういうことは、教育学部の学生が言うことさ。ついでに言っておくが、嘘つてのは相手がかせめるんだ。分からない? 空気だよ。一見もの分かりのいい教師に限つてそういう空気を作るんだ」

「先生が嘘を嫌うのは知っています。ご自身嘘を言わないし、生徒にだつていつも本音で迫る。でも、事実だけがもてはやされる世界つて、本当に健全ですか? 濱田先生だつて事実を隠すことがあるんじゃない?」

「湯沢は急に声を落とした。」「そうかなあ。こないだも一年坊主に言つたばかりだけどなあ。エロビデオは見てるし、女房とのセックスもまだ続いているとね。湯沢さんだつて若いんだし、エロビデオくらい見てるんでしょ?」

職員室には、唯一の女性教員である家庭科の三上玲子もいた。が、濱田は頓着しなかった。湯沢

つた。田崎光一が(ナイトブラック)を引退し、姉の広美もグループを脱けたのである。結婚を約束していた二人は、その後急速に大人びていった。田崎という男に、私は一度会つてゐる。暴走族の頭をつとめた者とは思えない、物腰の柔らかな好青年であつた。

「いろいろとご迷惑をおかけしますが、金作のこと、よろしくお願いします」

金作の家を訪ねたとき、病床にあつた母親に代わつて頭を下げたのは、姉の広美と、この田崎光一だつた。

テントの横を、綿菓子やヨーヨーを手にした子どもたちが、親に手を引かれて通り過ぎていった。盆踊りの終了を告げる放送が入つて、露店もあちこちで店じまいを始めたようだつた。二人が飲み残していったビールは、とうに泡が消えていた。大型の紙コップに、まだ半分以上残つてゐる。私は勘定を済ませ、一つ二つと照明の落ちていく境内にいつまでも残つた。二人は結局戻つて来なかつた。

5

夏休みが終わり、二学期が始まつた次の日。私はいつものように駅からの道を歩いてゐた。太陽はまだ高いところにあり、アスファルトの歩道をじりじりと焦がしている。そんな太陽を名残惜しく見上げながら、夕方になればまたひと雨あるのだろうと、そんなことをぼんやりと考えていた。通り雨程度だつたものが、台風を運ぶ本格的な

みに一口つけてから、なおも続けた。」「いくら教師然と振る舞つてみたつて、やつらは知つてるよ。糞もすれば、自慰行為もする。教師なんてのは神聖な代物じゃないつてね。分からない? きれいごとじゃないんだよ、教育つてのは」

「睨みつけるようにして聴いていた湯沢が何か言おうとしたとき、三上が口を開いた。私より一回り年上で、小学生の子どもが一人いる。はつきりものを言うタイプで、濱田と衝突することも度々あつた。

「何とかつていう服飾ブランドのポスターに、この男社長のヌードが使われて話題になりましたよね。ずっと昔。それを思い出しました。制作者は、リアルさだけが人を動かすとも思つたんでしょうけど、単なるびっくり箱ですわ。でなければ、ゲリラ的にあんなことをやつて事実ばかりも醜いと教えただけ」

三上は濱田を見なかつた。三上からふいに視線を投げかけられたのは田島だつた。」「ええ、覚えてますよ。あそこの広告は過激が売りにしてすからね。まあ、男の裸体はいいにしても、せめてシェイプアップをしてからにして欲しかったですな」

「ワイドショーのたぐいが蔑視されるのも、あれが二言目には事実だ真相だつて騒ぐからです」

「ワイドショーはいかんです。あれは文字通りショーですからね。もっとも、うちの女房はテレビそのものを見ませんがね」

同僚のやり取りに耳を傾けながら、私は健太が刺した相手を思つた。盆踊りの日、露店の陰から

こちらをうかがう人影があった。あれが中学生で、健太が刺した相手だというのだろうか。想像ははじめ海中をゆるやかに漂っていたが、やがて確信の錨を下ろして動かなくなった。あのとき健太を引き留めなかったのは自分なのだ。ならば過失は自分にある。私は血流が加速するのを感じながら、しばらくは口を開くことができなかった。

6

健太が刺した相手は、やはり盆踊りの日に見かけた子だった。

夏休みに入ってから、健太は後輩の不良グループと頻繁に遊ぶようになった。ところが、改造バイクの売り買いを巡って関係がこわれた。不当な価格で売ろうとする健太を、後輩が避けるようになり、しまいはシカトするようになったのである。両者のあいだに衝突が起きたのが、盆踊りの日だった。健太はシカトする後輩に詰め寄り、ライダー格の一人にタイマンを申し入れた。このときは金作の取りなしがあつて大事には至らなかった。事件が起きたのは、始業式の日だった。買い取りをしつこく強要する健太を、とうとう五人の中学生が取り囲んだのである。袋叩きにあうすんのところ、健太はナイフを抜いた。

「金作には伝えてくれたんだよね」
浜田は椅子に座って腕組みしたまま、西田に言った。

「間もなく来るはずです」

西田は答えて、大きいため息をついた。一昨日も昨日も、金作は学校に來なかつた。それに苛しいのかの生徒に尋ねてみたが、目当ての生徒はもう帰つたとのことだった。
正門の手前にはロータリーがあつて、それを巡るように車やバイクが停めてある。それが一台一台私の脇をすり抜け、われ先にと正門を出ていった。夜九時になって、やっと四時間ぶんの授業から解放される。放課後の部活動に精を出す者もいるが、あくまでも少数派だった。

部活にも参加しないで、連中はどこで遊んでるのか。そのようなことを尋ねて、浜田から皮肉たつぷりに言われたことがあつた。

「あのねえ、連中は昼間働いてるの。それからつまらない授業を四時間も聞かされて、遊ぶ元気なんか残つてると思う？ ねえ、分らない？」

生徒が逃げるように正門を出て行き、ではどこに向かうのかと言つたら自宅しかないだろう。そう教えられたのは、浜田からのいつもの視線に耐えたあとだった。

「土、日だって、寝るだけで終わるやつが多いんじゃないかな。久保さん、人生つてのは楽じゃないんだよ」

冗談とも本気ともつかない言い方で、浜田はそうつけ加えたのだった。

「せんせい、何やつてんの、こんなところで」

後ろから声をかけられた。振り向くと、町田正人が例によって煤をつけたような顔でにっこり笑つていた。薄つぺらな作業着の中で背中を丸め、足踏みを繰り返している。熊も寒がるものなのだ。私は笑いそうになるのをこらえた。

「生徒に用があつてね。それより、そんな服じゃ風邪ひくぞ」

ついていた浜田は、今日やっと金作が姿を見せたと聞いて、担任の西田に呼びに行かせたのである。「メシが済んでからじゃ、だめですか」西田は何度か訴えたが、浜田は耳を貸さなかつた。

一時間目が終わると、定時制では職員も生徒も給食を食べることになってた。出払ってしまった職員室には、浜田と西田以外には湯沢と私がいるだけだった。湯沢は机の上を整理しながら、何やら忙しそうにしていた。が、目はときおり浜田を探っていた。成り行きを心配しているのだ。それを見届けるまでは食堂に行かないつもりなのだろう。

「なんだよ。メシ食つてる途中なんだよ」

金作の声だった。職員室の入り口に現れた金作は、両手をズボンのポケットに突っ込んで、口ではまだ何かを咀嚼していた。

「金作、ここへ座れ」

いつの間にかソファに移動していた浜田が言った。瞬間、金作の表情がこわばつた。眉間に皺が寄り、前傾した眼鏡の奥で、目が次第に据わつていった。金作は、職員室に二、三步足を踏み入れたところから動こうとしなかつた。浜田は構わずに続けた。

「健太が中学生を刺した。現場にお前もいたなら、お前は退学だ。どうなんだ、事実を言ってみろ」

「退学うんぬんは、まあ置いといて、金作、何か知つてるのか」

西田が取りなすように言った。金作は何も答えなかつた。

「事実の一つ。下手な言い逃れはするなよ」

浜田の低い声がかた響いた。金作は浜田を睨みながら、

「だって、すぐ乗るもん」

正人はあごを斜めに突き出した。あごの先、すなわち正門脇の塀の向こうには、鉄の巨体が黒い影となつて控えていた。

「これから仙台だよ。たまらないよ」

「居眠りするなよ」

「授業中たつぷり寝たから大丈夫。じゃあね、せんせい」

逆らわないが、従わない。正人もそんな生徒の一人だった。勉強が嫌いで全日制高校を中途退学し、一年間社会の冷たい風に当たつた。定時制には三年生から編入した。辛うじて四年生にはなつたものの、相変わらず鉛筆を握ろうとはしなかつた。愛嬌はもつぱら教室の外だけのもので、教室に入ると、正人は不機嫌な熊になった。教科書もノートも開かず、教師から注意を受けて、それでものらりくらりと言い訳を繰り返して、しまいに寝てしまふのである。

ローギアを使って四トラックを引きずるようにならせると、正人はクラクションを二度鳴らした。大げさな余韻の音が夜空に尾を引き、赤いテールランプがゆらゆらと遠ざかつていった。私はそれを見送りながら、結局人間は一人なのだ、ふとそんな感傷にとらわれた。顔を上げ、夜空に星を探した。星は一つも見つからなかつた。

相手が五人だったことで、正当防衛とはいかないまでも情状酌量の余地はあるとされ、健太は保護観察処分となつた。相手が軽傷だったことも審判に影響した。事前に退学手続きをしたのは健太の父親だった。担任の西田はせめて結審後に引

つけていたが、ふいに宙を見上げた。そして静かに言った。
「退学願いの紙、くれよ。いたよ。健太にちよつとばかし加勢してやつたんだ」

「凶星だったな」

そう言つたため息をついたのは浜田だった。ソファから立ち上がり、職員室の隅に据えられたライターケースから退学願いの紙を取り出すと、浜田はそれをひらひらさせながら金作のもとに歩み寄つた。

「警察には自分で行け。事実を話すんだ」

浜田の言葉を、金作は相変わらず宙を見ながら聞いていた。と、金作が首を傾げるようにして私を見た。薄い笑みを浮かべている。その笑みに、あきらめとも悲しみともつかないような影が一瞬差したそのときだった。向き直りざま、金作は浜田に掴みかかり、浜田をその場で殴り飛ばした。

「やめろ！」

湯沢が叫び、西田が金作に飛びかかつた。

「事実、事実つてうるせえんだよ！ 健太となんか本当は一緒にいねえよ！ 事実はいねえんだよ！」

そう吠えた金作は、西田を振り切つて職員室を出ていった。

7

十一月も末になると、カーディガンぐらいでは心もとないほどに、夜風は冷たさを増した。用事を思い出して一人の生徒を追いかけ、正門付近までやつてきて、私は思わず身を縮こまらせた。何き留めたが、父親は聞き入れなかつた。背筋の伸びたいかにも航海士といった感じの父親は、健太の荒廃ぶりを今回はじめて知つたと言ひ、だから言い逃れをするというのではなく、丁重に何度も詫言ひた。

健太は、母親の実兄、すなわち伯父に引き取られることになつた。父親は事件をきっかけに陸に上がるつもりでいたが、伯父が止めたのである。健太のことは自分が引き取ると言つて、家業の和菓子屋に、若い従業員を一人増やすことにしたのだ。

健太が数ヶ月ぶりに学校に姿を見せたのは、袴が白い花弁を葉陰にこっそりと開き始めた頃だった。ある晩、車やバイクが競つて正門を出たあと、それと入れ替わるように大型の国産車が正門をくぐつた。事務室前の来客用玄関に現れた健太は、伯父の住む高崎に明朝立つのだと言つて、スリッパを差し出しても靴を脱ごうとはしなかつた。髪を短く刈つていて、トレッドマークの前髪は横分けされていた。憑き物の落ちた顔には、十七歳のあどけなさのままあつた。

「金作先輩が学校を辞めたつてほんとですか。今回の件、先輩は関係ないですからね。俺一人ですつたことだから。それだけは言つておこうと思つて」

健太は、出迎えた西田と私にそう言い、担任の

西田には菓子折りを託した。

「親父が先生方によくつて」

健太はそう言つてロータリーの車を振り返つた。三ヶ月余りのあいだに、何があつたのか。何を思い、何が変つたのか。水を差し向けてみた

が、健太は多くを語らなかつた。自分の父親がどういう人間か分かつた。そのことだけを、ぼつりぼつりと愉しそうに話ただけだつた。チャイムが鳴ると、

「もう行かなくちゃ」

それに合わせて健太も時計を見た。授業があるからと、西田はその場で健太に握手を求めた。

「次は授業がないんだ」

私はそう言つて、健太と一緒に玄関を出た。

「いつまで向こうにいるか分かんないけど、帰ってきたらまた光泉寺の盆踊りに行こうよ。金作先輩と三人で。ね、せんせ」

別れ際にそう言つて、健太は待たせてあつた父親の車に乗り込んだ。父親は私に気づくと、慌てて車から降りた。そして自分の年齢の半分にも満たない新米教師に、深々と頭を下げた。

怪我をした生徒を病院に連れていき、家人に引き渡してから学校に戻つた湯沢が、

「今日、健太が来たんだつて」

と私に声をかけたのは、同僚がみな帰つたあとに遅い時間だつた。

「いまからじゃ、いくらも飲めないけど、どう？一杯」

湯沢は机から首を伸ばして、笑いかけてきた。十二時きっかりで客を追い出す頑固な焼鳥屋は、正門のすぐ目の前にあつた。私たちは帰り支度を済ませて、一緒に職員室を出た。

カウンターのほうがむしる満杯で、湯沢と私は座敷のテーブルに向かい合つて座つた。ビールで乾杯し、健太の話題でひとしきり盛り上がったの

ち、いつしか話題は浜田へと移つていった。「久保さんは浜田先生が嫌いでしょう。ワンマンで下品で自分だけが何でも分かつてるような言い方ばかりして」

「……」

「エロビデオの何だのつて、ずっと前に言ったの覚えてる？ ああいうときは俺も本当に頭にきちゃつてね。よっぽどみんなの前で言おうかと思つただけ……」

「言いよんで、湯沢はおしほりに手を置いた。」

「みんなの前で言う？」

「……浜田先生つて、じつは息子さんを死なせてるんだ」

「死なせてる？ 息子さんなんていたんですか」

「何でも正直に言う人だけど、このことだけは絶対に喋らない。俺の大学のゼミの大先輩に、浜田先生と昔同僚だつた人がいて、その人から俺は聞いたんだけどね」

「二十歳を過ぎた娘さんが一人いるとは聞いてましたが……」

湯沢は、隣のテーブルを見やつて声を潜めた。

「十年以上も前のことだけど、息子さん、自殺したんだ。中学の卒業式の前日。高校に全部落ちて、中学浪人が決まつたそうだ」

「自殺……？」

「浜田先生つて昔はとにかく生徒を応援するタイプで、息子さんにもそうしたらしい。『やればできる。がんばれ』つて」

「でも、駄目だつたわけですね」

「それからだつていうんだよね。あの人が本音で

しかものを言わなくなつたのは」

「おまえが大学なんかに行けるわけねえだろ、といううなせりふを、浜田が生徒にぶつけるのを聞いたことがあつた。本当のことだからしょうがねえと、菌に衣着せずに言うのである。茜のときもそうだつた。いまはやる気がねえんだから辞めると、一方的に決めたのは浜田だつた。」

「つまり不用意に甘い夢を見させちゃいけないことですか？」

「無責任に希望ばかり与えても、現実には打ちめされるのは生徒だからね。地に足のついたアドバイスをしろつてことだろうね」

「地に足のついた、ですか。要するに教師も採算を見込んで事に当たれと」

「……」

「まるで経営ですね」

私の言葉に、湯沢は首を傾げた。湯沢のグラスにビールを注ぎ、自分のにも注いだ。言つていいものかとためらいながら、私は口を開いた。

「現実を踏まえて、勝ち戦だけをねらつていく。企業経営ならそれでかまいません。でも、負け戦を嫌つて、生徒をほどよい成功に押し込めようとするなら、それは教師の傲慢、でなければひがみです」

「ひがみ？」

「『大学はそんなに甘くないぞ』『ミュージシャン？ なるわけないだろ』こういうのを地に足のついたアドバイスと言つては、おかし

いですよ。結局、自分の経験に照らして判断して

るだけです。教師自身のケチな経験を基準にされたら、生徒は迷惑です」

あごの下にグラスをぶらさげながら、湯沢がじつと聞き耳を立てていた。まっすぐな視線にうながされて、私は続けた。

「まぐれで大学に受かる人生だつてあるし、突然開花する才能だつてあるんです。不運で意気地のない教師の人生なんかは棚上げにすべきです。『どうなるかは分からない。だが、やれるだけやってみろ』せいぜいこう言つてやるのが、本当なんじゃないでしょうか」

鬱憤は思った以上に溜まつていた。口を開けば、言いたいことはいくらでも出てきそうだつた。私はそれらを腹の底に流し込むつもりで、ビールを一気に飲み干した。グラスを置く気配があつた。

「なるほどね。言うことは分かるよ。『やれるだけやってみろ』、これはいい。でも、その子が失敗する。自殺までする。さあ、そうしたら俺たちはどうしたらいいんだろう」

湯沢は、本当に困つたというように一度宙を仰いだ。そして視線をグラスに戻すと、それをいつときもあそんでから続けた。

「教師は自分のケチな経験に照らしてものを言うつてことだけど、しよせん経験の範囲でしかもの

は言えないし、言っちゃいけないんじゃないだろうか。俺だって浜田さんの事実崇拜にはうんざりして

るけど、事実や現実を踏まえない教育も、危険ではあるよね」

程度の問題なのだろう。夢に傾き過ぎて、現実

実に引つ張られ過ぎていけない。中庸など言つてしまえば退屈だが、要はバランスなのだ。分

かつていなながらも、浜田のやり方を思うと、反発

せずにはいられなかつた。亡くなった息子さんを

賀 状

三が日を妻の郷里である新潟は柏崎で過ごし、二時間前に旅装を解いた。帰省ラッシュは避けつつも、日本海から所沢までとなれば、一日仕事になる。妻と四歳の娘はとうに寝息を立て、私だけが台所のテーブルについていた。

全日制にもワルはいた。隠れてタバコを吸い、嘘をついて学校をサポート。定時制のワルとは、しかし似ているようで違つた。全日制のワルに、卒業式で泣くやつはいないのだ。

先方でのちよつとした揉め事も手伝つて、疲労はピークにあつた。私は二杯目の水割りを作り終えると、やつとその気になつて、先ほどポストから驚掴みにしてきた賀状の束を手元に引き寄せた。一枚ずつめくつては眺め、東の右手に重ねていく。左右の束の厚みが等しくなつた頃だつた。見慣れない毛筆体が現れた。筆圧が強く、初心者にありがちな震えがところどころに走っている。差出人名を見て、目を疑つた。「岡田金作」とあつた。何度もひっくり返しては、一文字一文字に見入つた。刹那、四年前の深夜の電話を思い出し、私は総身肌が粟立つのを覚えた。

定時制には結局五年間勤務した。その後、いまの全日制へ転勤となり、もうすぐ四年目が終わろうとしていた。が、全日制には、いまだ馴染めなかつた。定時制時代には、生徒が結婚したり出産したりすれば、生徒会費の「慶弔費」枠から祝い金が出た。全日制では、結婚や出産はタブーである。「慶弔費」枠の「慶費」のほうに、実体はなかつた。当然のことかもしれないが、そんなささいなことが違和感としてなかなか拭えなかつた。

る生徒一人ひとりに、校長が卒業証書を手渡すのである。パッヘルベルの『カノン』が小さな音量で流れる中、生徒はステージ中央の階段を順番にのぼっていった。白い歯を見せていた子が、証書を手にしたとたん表情を固くし、口を真一文字に結んで階段を下りた。証書を受け取った瞬間、解き放たれたような笑みをこぼす者もいた。思いつきのやり方で、みな喜びをかみしめていた。

それらの様子を見ながら、私自身森厳な気分になり始めたその矢先だった。金髪を肩まで伸ばした男子生徒が、登壇の途中で不自然な動きを見せた。直後、制服のズボンがくるぶしまで落ち、赤いパンツがあらわになった。式場前方からはどつと笑い声上がり、後方の保護者席はざわめいた。私がいた教員席は何かを飲み込むような音以外になく、嫌な沈黙に包まれた。男子生徒はあわてた素振りでもズボンを持ち上げた。ベルトを締め、後ろを振り返った。間延びした顔が、満足そうに歪んだ。それに応えるように、ひときわ甲高い笑い声が、卒業生の一角から上がった。

「あいつ、やりやがった」

沈黙を破って一人の教師が言うと、
「えっ、いまのわざとやったの。嘘でしょ、信じられない」

女教師が呑気に答えた。
皆勤賞の表彰に移った。名前を呼ばれた生徒は、返事をしてその場で起立することになっている。果たして誰が呼ばれるのか。みな興味はあるのだろう。一見無関心を装っているが、卒業生たちは呼名の声に耳を傾けているようだった。が、赤パンツの連中は、そんなところに関心はなかった。

され、そこに棒でも差し込まれたような気がして、私は反発した。

「教師という職業に不満はありません」

「では、何が？」

「自分が教師であることが不満なんです」

「……」

「向かないんです」

「向く仕事があるとも？」

「あるはずですよ」

「いや、ないよ。祐司君には」

「探します」

義父はそこではじめて笑みを浮かべた。菓子盆を押しつけて私に勧め、急須にお湯を満たした。私の湯飲みを引き寄せ、お茶を注ぎ足した。

「向くものを探す。……奇異な話だね。適性などというものは、あとでそうと気づくもの。僕はそう思っていたがね」

「九年間もやってそうと気づかなければ、辞めるのが学校のため、生徒のためだと思います」

「一見さきよいけど、不遜だね」

「不遜？」

「学校の権限を骨抜きにしておきながら、一方で教師に家庭教育のツケを払うような真似をさせる。たしかに祐司君の言うとおりかもしれない。荒れた学校に勤めていけば、国や世間を恨んでそんな風にも言いたくなるだろう。鶏同然のばか者の話だって、聞いているだけで腹立たしい。でも、だからどうだと言うんだろう」

義父は、自分の湯飲みをのぞいていた。何かをそこに映し見ているようだった。しばらくして、また口を開いた。私に視線を戻し、こんどは厳し

「六組、立花ゆりこ」

皆勤者最後の名前が呼ばれたときだった。

「ふわいっ」

と奇矯な裏声を発して、こんどは赤毛の男が立ち上がった。下卑た笑い声が、またもや静寂を冒した。

「バカだよあいつ」

「やべーよ」

仲間の声は、一見批判の形をとるが、実際にはお囃子でしかない。赤毛はそれに後押しされて、
「えっ、俺じゃないの？」

と、とぼけた声を出した。頭に手をのせ、鶏のように首を前後させて詫げる仕草を取った。神妙な顔を作り、反省したような様子で腰を下ろしたときには、それがまた仲間の笑いを誘った。

立花ゆりこ本人は、騒ぎの中、隠れるようにして立ち上がり、両手で掴んだハンカチを強く胸に押し当てていた。出ていって指導すれば、式の緊張感に余計損なわれる。先ほどの教師が「あのやろ」と小声で吐き捨てたきりで、教員席は結局沈黙を守り続けた。

腰を下ろしたあと、赤毛の男は仲間へ声をかけ、また声をかけられたりして、しばらくヒーロー気分を味わい、しまいに寝てしまった。私の席からはその赤毛がよく見えた。ソフト・モヒカンという髪型は、赤毛であるだけに、鶏のとさかそのものだった。おそらくは質、量ともに鶏と変わらなはずの脳みその在りかを、私は悪意を込めて想像した。膝の上に置いた拳の震えは、それでも止まなかった。

私は、三月で教師を辞めるつもりだった。大学

い眼差しを送って寄こした。

「矛盾。絶望。これは人生の本質だよ。そして、教育の眼目が生き抜く意志を育むことであること、それは裏返しじゃないか。祐司君はどんな場所に立って、教師に向くの向かないのと言っているんだろう……」

義父はそこまで言うと、口を閉ざしてしまっ

た。三杯目のウイスキーには水も氷も入れなかった。台所の椅子にもたれ、あらためて金作からの年賀状を見た。型どおりの文面と拙い文字。だが、そこには金作の息づかいがそのまま現れているようだった。私は息苦しさを覚えた。あるいは住所を見てそう感じたのかも知れなかった。住所には私の見知らない土地の名があった。

「父親に見つかったら最期よ」

金作が吐息とともにそう漏らしたのは、在学中に住所を変えたときだった。父親からの逃亡生活は、おそらくまだ続いているのである。

私は、酔いの回った頭で、年賀状の返事を書いた。すぐに会いたい。電話をくれ。そして、四年前のあの件はどうなったのか。私はいつしか、懇願するような気持ちで筆を走らせていた。

四年前の深夜の電話。それは金作からのものだった。早めの床に就いていた私は、十二時過ぎに電話で起こされた。

「センセ？俺です。岡田金作です。通信制の高校を卒業したんですよ、先月。それを報告しようと思って」

受話器の向こうから、懐かしい声が告げた。唐

時代の友人が小さな出版社を立ち上げ、そこに誘われてもいたから、決意はほぼ固まっていた。そのことを告げて、一昨日、義父と言いつ争いになった。昼食後、初詣に行くと言って、義母と妻が娘を連れて出たあと、義父と私は茶菓をばさんで向かい合った。

義父は民間会社を退職して、いまは釣り三昧の日々を送っている。が、潔癖で剛直な気質は少しも変わっていない。教師を辞めるといふふいの宣言を受け、しばらくは私の言いつに耳を傾けていたが、それが終わると義父はきっぱりと言った。

「私のような会社人間からすれば、やっぱり教師は世間知らずのアマちゃんだね。祐司君を見て思ったよ」

「……」

「世間知らずって言ったって、教師は経済を語れない、浮世離れしている、なんていうあれじゃないよ。会社人間だって自分の領分以外は何も知らない、かたわだからね。僕が言うのはそんなことじゃない」

義父はそこで声を半分にした。

「教師。こんな尊い職業が他にないということ、教師自身がやっぱり分かってないってことだよ。人間を育てる。その成長に直接関わる。この尊い仕事を、世間はみな羨んでるんだ。何かといえば教師が叩かれるご時世だが、それは羨望の裏返しなんだよ。教師になりたかったとはよく聞くが、辞めたいとはねえ……。贅沢な話だ」

いま思えば、義父の言葉は私へのエールだと分かる。だが、自分の中にある脆弱な部分を見透か

突だった。

「通信制を卒業？おまえが？嘘だろ。だいたおまえ、鉛筆の持ち方知ってるのか」

頭の中を整理できないまま、私は反射的に皮肉を言った。こんな時間に電話をかけてくる非常識さに腹を立てていた。返ってきたのは、はじめより落ち着いた声だった。

「ほんとですよ。三年でやれるところを四年かかりましたけどね。いい先生に出会ったんです。つきつきり勉強見てくれて……」

「それより、いま何時だと思ってるんだ？」

私は金作の言葉をささげた。そして、高校の卒業資格以上に大切な世間常識だとつけ加えながら、金作の非礼を咎めた。

「え？先生寝てたんですか。寝るのは毎日二時過ぎだなんて、言ってたから……」

夜中の一時ぐらいいまだ電話をくれてもいいぞ。独身の気軽さから、当時そのように生徒たちに言ったのは自分だった。それを思い出して、私はばつの悪い気分を味わった。非礼はむしろこちら側にあつたかと反省しているところへ、金作の小さな声があった。

「すいませんでした」

私は金作に同情し、語調を変えた。

「この四月から全日制に異動したんだ。結婚して赤ん坊もいる。電話番号は変わってないが、いまおまえがかけるところは例のぼろアパートじゃないんだよ」

私の声に、金作は静かに耳を傾けているようだった。私の話が終わると、金作は一段と声を落とした。その先生がいなかったら今回の卒業はな

「久保先生、自分、これであがりますが……」
ふいに声がかかり、振り向くと橋本が職員室を出ようとしていた。部員が二人しかいない野球部を、根気強く指導している熱血漢だ。この春に大賞を出したばかりの新任教師である。
「お疲れ様。それにしても、たった二人を相手によくやってるね」

「生徒に引つ張られてるんですよ。何しろあいつら、休まないですから。甲子園って言葉も当たり前のように口にするんですよ」

「あきらめてないんだ」

「そうみたいです。来年一年生が七人入れればメンバーは揃う。それがあいつらの計算なんですよ」

橋本は日に焼けた顔をほころばせ、
「じゃ、失礼します」

そう言って出て行った。一年生をあと七人。そして甲子園出場。本当は橋本の計算なのだろう。生徒こそは、橋本の熱気に引つ張られているのだ。

新年度を迎え、私は一年生の担任を受け持つことになった。そればかりか、生徒指導部として連日学年団を招集し、意見を束ね、指導方針を立てる日々を追われていた。問題は山積していたから、四月に入ってから、連日帰宅は遅かった。机の上を整理してから、ノートパソコンの電源を切った。そして戸締まりのために、一つだけ開いていた窓に向かった。いったん閉めかけて、思いどまり、窓外に顔を突き出した。グラウンドの向こうには漆黒の樹林公園が広がり、その向こ

うには街の灯が見えていた。
夜九時と言えば、N高定時制では野球部がそろそろ練習を始める時間である。一つしかない照明が届く範囲そのままの形に布陣して、部員がノックを受けるのだ。そのいびつな陣形が、グラウンドの闇に一瞬浮かんだ気がした。

野球部の副顧問として、私も戯れにノックを受けたことがあった。高く打ち上げられたボールは、照明の届かない上空で一度消える。と、次の瞬間には数メートル先にまで来ている。結局間に合わず、私はボールを顔に直撃させたのだ。施設設備の問題だ。教育委員会はこの現状を認識できているのか。このままでいいんかい。かろうじて洒落を言っただけはみたものの、鼻血を見たときとたん悔しくなって、私はまたあれこれと言ひ募った。それをしらーっと見ていた生徒が言った。

「先生よお、がたがた言っただけで、いい加減覚えるよ。球見るんじゃなくて、球筋見るんだよ」
球そのものを見るより、球の軌道を想像することのほうが大事なのだ。生徒はそう力説したのである。

四月になっても、金作からの連絡はなかった。私はそれを永遠に待とうとは考えていなかった。ただ、金作が嘘の背後に隠したものが、浜田が事実の後ろに隠し持っていたものが知りたかった。それは、全日制の鶏どもがひた隠す、涙の在りかを知ることでもあると思ったからだ。教師を続けようと思った。

窓枠に肘を乗せたまま、ふと思いついて息を吸い込んでみた。沈丁花の香りはどこにもなく、冷気の中に微かな土の匂いを嗅いだだけだった。と、

急に風が強く吹き始め、顔が風になぶられた。春の風は、いつまでもそうされていたいほどに、心地よかった。

鈴木信一

すずき しんいち
1962年埼玉県生まれ。横浜国立大学教育学部国語科卒業。埼玉県狭山緑陽高等学校教諭。著書に『800字を書く力』（祥伝社新書）がある。宮本輝氏選・第37回北日本文学賞選奨、第18回東北北海道文学賞など受賞。



文芸東北

宮城県

仙台から日本文学に新風を吹き込む

月刊・同人雑誌『文芸東北』は昭和34(1959)年11月25日に創刊第一号を発刊。いろいろ幾多の苦難とたたかひながら、平成20(2008)年の1月号で500号を記録。

当時詩を書き、エッセイストとしても活躍していた新聞記者の大林しげるは、敗戦前に台湾の中等学校の教諭でその作品『南方移民村』で台湾文学賞を受賞した浜田隼雄や、NHK仙台に勤務していた改造文学賞受賞の作家たちをはじめとし

て、作品を発表する機関の必要を痛感していた詩人・作家・エッセイストたちと語り合っていた。

さらに東北大学文学部長で歌誌『群山』を刊行した著名な歌人である扇畑忠雄教授、孫柳の号で俳句『饗宴』を主宰し詩人としても活躍していた永野為武東北大学教授(理学博士)、詩人として活躍していた石井昌光宮城学院女子大教授(後に学長)の三氏も大林の熱声にも二もなく、最初の同人となって支援した。

『文芸東北』は昭和35(1960)年2月、第三种郵便物認可を受け、平成20(2008)年6月号現在で505号を迎えた。

この長い継続の中で教授たちは三氏ともにそれぞれの善行を褒められて無事安寧の大成に住み、多くの同志たちも善行を賞讃されて幸せの郷の住人になっているはず。会員諸賢の移動はあったものの、地方の文学誌としておよそ五十年に近いうち、欠かすことなく発行し続けたことは、文学の世界の人々の努力の研鑽と積善によるのだと思惟している。

また、文芸誌発行だけにとどまらず、平成元

文芸東北 VOL.50 2008 3 通巻第502号
第18回東北北海道文学賞発表・選評・受賞作品掲載
第18回文学賞 受賞作品 「賀状」鈴木信一
文芸東北新社 http://www.bilshinbun.com/bungei/

(1989)年に『文芸東北』創刊30周年をよるこび、同人一同の大賛成でさらなるよき社会の創造をめざして、『東北文学賞』を創設。人間社会の文化と平和の世界と、すばらしい人間精神を築きゆく新人作家の発掘・育成、ひいては現代から未来へと、日本文学に新風を吹き込むことを念願、選考委員に八木義徳、宮本輝、青野聰の三氏を迎え、第1回目は東北6県在住者に限定して作品を募集した。

翌年の第2回より、伊藤桂一、大河内昭爾、三好京三の三氏を選考委員に、北海道の方々の熱意を受けて『東北北海道文学賞』と改め、応募条件を東北・北海道地域の在住者、出身者など地域に関係ある方々に広げ、今年四月に第18回の受賞者を世に送った。現在は第19回の文学賞の作品を受付中である。

第1回の文学賞受賞の渡辺毅さんは、その後、第12回坪田譲治文学賞を受賞し、さらに第8回歴



挨拶する「文芸東北」代表・大林しげる



東北北海道文学賞贈賞式で本年度の受賞者・鈴木信一さんに賞状と賞品を授与する大林しげる代表

史群像大賞優秀賞を受賞、その後、学研M文庫より「そこむし兵伍郎」「鳴動」「雪すだれ」「風を斬る」などの名作を発刊。さらに後進の発見、助言、指導に献身的な奉仕をされている。

第4回受賞者の桂城和子さんは、続けて三田文学新人賞を受賞。第7回受賞者の大浜則子さんは、続けて第1回海洋文学大賞優秀賞を受賞している。

また、同人の中には、小説作品や詩集を上梓している人も多い。小説では、大林しげる、渡辺毅、安久澤連のみなさん、詩集では大林しげる、大林美智子、佐藤達男、小山修一のみなさん、随筆作品では古橋弘子、沢村柳子、牧道子、藤木実さんがいる。

現在同人は34名、会員多数。

会員登録で誌への掲載権を持つことになり、文芸東北を発表誌として世に問うことができる。会員会費は年間五千五百円、同人は同人会議において推薦される。同人会費は年間一万円。

月に一度（土曜日の午後二時～五時）、同人、会員による合評会を開催し、文学を語りあっている。

文芸東北の表紙絵、および目次のイラストは同人の作品である。

日本文学に地方から新風を巻き起こすことを目標に、今後も仙台から全国に向けて発信し続けたい。



贈賞式会場の仙台文学館

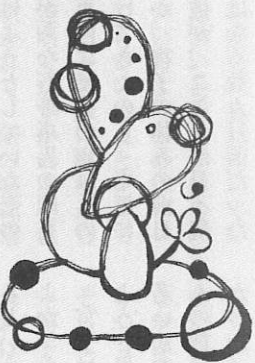
文芸東北
〒980-0822
仙台市青葉区立町二五・四
マンション立町一〇三号
☎022-223-0333

同人雑誌優秀作

カプリチオ

26号

蜘蛛の部屋



谷口葉子

その老婆が電車に乗り込んできたときから宮子は気になっていた。背中のみ、小肥りな印象というよりも、その手に持っている荷物の数の多さだった。宮子の前の席が空いていたので、当然のことのようにその前にきた。

小さいビニール袋を三つ、座席に座る前に座席の背壁の、本来は立つひとのためにある把手にのろのろと掛けた。それから背中に背負っていた細長のリュックサックを足もとにおろしたのに、まだよれよれの紙袋が大小三つ腕の中にある。大きめの紙袋のほうを通路側にある座席の手すりにつか、残りの二つを自分の膝の上のせて、やっと座席に腰をおろした。宮子は読みかけの雑誌から眼をあげて、その見知らぬ他人の手荷物を数えていた。リュックをいれて合計七個である。宮子はこの老婆が、これらの手荷物を抱えて降車して行くところを眺めたいと思っている。

宮子には奇妙な癖があって、三個以上の荷物を抱えると、十回うちの三回はその中の一つをど

こかに忘れてしまうのである。しかも今、この私鉄沿線の電車に宮子が乗っているのは、三日前に車内に忘れた紙袋を海辺のはずれにある私鉄の終着駅まで、取りにいったの帰りなのである。奇妙なことになったのは、だいたい宮子の手に戻ってくるようになっていたのだ。

宮子の視線はどうしても、その老婆の観察になる。老婆は二つの紙袋を膝に抱えたまま居眠りを始めた。なんともうらかに睡魔にひき込まれていくさまも見えてしまった。こうなると、大胆に観察出来るというものだ。老婆といっても、腕のたくましさからいって六十歳を少々過ぎたといったようにもみえる。服装に視線を移すと、レース地のベストの下の黒いTシャツの胸には、有名ブランドの銀刺繍がついている。靴もパンプスだから、宮子よりもおしゃれだった。

宮子の視線が小さく動くものに止まった。手すりにつかえた大きめの紙袋のはしから糸がのび、蜘蛛がゆらりと揺れている。紙袋の中から緑いろの

シソの葉がのぞいているから、土のついた根株をもらってきたか、購入したかのついでにこの蜘蛛がついてきたのかもしれない。宮子の興味は蜘蛛にうつった。紙袋の側面を蜘蛛は自分の尻から吐いた糸でのぼり下りを繰り返した。つつつと上り、すつと下りている。宮子と老婆のあいだも微妙で、少し足の位置をずらして眺めることにな

るとき電車の中で、蛾や蠅をみることはあるが、蜘蛛というのはめったにない。いや窓の開かない最近の電車ではめったにお目にかからない風景である。一直線に伸びている糸を上へのぼったり、床のすれすれまで下がったりを繰り返しているだけなのだが、蜘蛛のしぐさに魅せられてしまった。ふいに目覚めた老婆の眼とぶつかった。なぜだったか宮子と眼を合わせて、老婆はにっこり笑った。蜘蛛ですよ、わたしの蜘蛛ですよと魔法使いのようなバーチャルの世界の眼で、攻撃してくるのだった。えっ、宮子に反問する間も与えず

老婆は自分の居眠りに戻っていったところをみると、これは宮子の思いが違ったかもしれない。

宮子の下車する駅が近づいた。どうやらこの老婆より先に降りるとなれば、迷うことなく、この蜘蛛をつれて帰りたいと思っている自分がいた。向かいあった四つ座席の周辺では、この蜘蛛の存在に気が付いているひとはいなかった。老婆のとなりの中年男は口を開けての居眠り中だし、宮子のとなりの茶髪の女の子は手鏡で、マスカラに余念がなかった。宮子はティッシュで自分の靴を拭くふりを装いながら、ぶらさがって来た蜘蛛をその紙にふんわりとつつんだ。そのときまた、にいつと老婆の赤い大きな眼が見開いた。宮子はぎろつとしたその眼をうけて、いただきますといった。声にはしないが、はつきりと返した眼になったつもりだ。老婆は多少目覚めたけはいで、いくつもの紙袋を手探り始めた。ついに背壁の把手にかけたビニール袋を膝におき、サンドイッチを取り出したときには、状況が読めてきた。老婆にはこの蜘蛛の存在だけではなく、宮子を含める周囲が分かっているようなのだ。

ことは簡単にすんだことになる。ティッシュをふんわりと手の握りにおいたまま、宮子はいまいな礼を残して次の駅で降車した。

ホームの階段で立ち止り、そつとティッシュを開いて見た。蜘蛛は息を殺して動かなかった。灰色とみたその蜘蛛はほんやりと黄色くて胴体から細い足が伸びていた。宮子はその蜘蛛を手のひらでみながら、駅から五分のところにあるマンションの部屋に帰った。

さてこの蜘蛛をどこにおくか。2Kの狭いひと

品を並べたりして美容院は明るい雰囲気になったが、宮子が黙々とこなしてきた実務は、こういう場末での零細経営の屋台骨といってよかった。

新しい店長は戸村みつかといった。まもなく三十歳というが、すらりと細身で二十歳前半にかみえなかった。仕事の勘どころには素早いものがあるのか、一回り年上の宮子の扱いに迷うことなく、つかいこなしてきた。これどうするの、こういうときはこれでいいの。宮子にもすぐに答えられないことがあったりするが、ほつとけない気持ちになつてくる。

みつかのカットの腕は確かにみえた。今の若い女たちは殆どパーマをかけない。カット専門店もあるくらいだから、美容師もそのほうの腕をみがかのらう。だがこの店は場末の商店街の一角にあるから、中年以上の主婦が固定客だ。カットだけの若い娘らより、白髪染めの中年客のほうを数多くこなす。

たしかに美容院「ル・シエール」は気紛れな若い客をふやした。忙しくなる月末の金曜日と土曜日は日曜日に若い男性の美容師を採用した。名前を秋山くんといった。みつかと仲がいい。単なる男友達なのか、恋人どうしなのか宮子には判断できないまま、さらに忙しかったり暇だったりしながら、宮子はこの美容院の古い顔なじみとして、ほかへ転職する機会を失った。

ベランダに放したあの蜘蛛は、幾重にも固く天をむいて重なり合った丸い葉っぱと幹の、フチベニベンケイの鉢植えの真ん中あたりにけはいを感じる。あまり姿はみせないが、いるような気がするから不思議だ。ベランダに出て、フチベニベン

り暮しの部屋を蜘蛛の巣城にする気持ちはなかった。西側のベランダに出てみた。ここは西陽がよかった。数年前に二枚のすだれをさげた。そして鉢植えが数個。正確にいえば、生きているのはほつたらかしても枯れないフチベニベンケイの二つの鉢植えだけで、そのほか大小数個の鉢は、乾いた土をかためたまま放置されているといつてよかった。蜘蛛のすみかはここしかなかった。

宮子はフチベニベンケイの葉陰の下に蜘蛛を放した。蜘蛛は警戒しているのか、しばし息を殺して動かなかった。宮子は知らぬふりを決め込んでそこを離れた。その蜘蛛がベランダのかたい柵を越えて右隣りのベランダへ這っていったとしても、あるいは真下の一階のガーデニングの粋をこらした緑あふれたベランダへ糸をたらし逃げてたとしても、それはそれでいいと思うしかなかった。

部屋に夏の夕暮れがきていた。思いがけない蜘蛛のために、晩飯の買いものを忘れたことにやつと気がつくことになる。きょうは宮子の休日の火曜日だった。私鉄沿線の海辺の終着駅へ三日前の忘れものを取りに行った帰りの、いつてみれば、忘れものとあの蜘蛛で一日が終ろうとしている。

宮子は重いふたをして避けようとしていた壺の前に立ち止まった。伏せ眼がちな石野卓馬の顔を正面においた。三日前に電車内に紙袋の忘れものをしたのも、蜘蛛を引き受けてきたのも、卓馬につながらものではなかったか。宮子の休みの前日には決まって現われていた彼が、ここ一か月不規則になった。いや一か月ではなく数カ月前だった

ケイの二つの鉢に水をやりながら、逃げたついでいんだよ、どぞ逃げてくださいと声をかける。ある朝、いつものように、いいよ、このベランダがつまりならなかったら逃げてもいいのよといつてみると、鉢の近くのコンクリートの床に脱皮がらをみつけた。こわれそうな透明でかすかに黄土色で、拾おうとしたら、風に吹かれて一階の庭に落ちていった。少しわかった。この蜘蛛助はまだ子供なのだ。脱皮を繰り返してオスカメスに成長していくのだろう。

卓馬からはずうつと連絡がなかった。こちらから連絡をしたほうがいいのかどうかさ迷っている。自分をみている。恋のおわりと受け取っている。思い出すのは最後に会った日のことだ。とりたててちがいはないのに、卓馬は奇妙に落ち着きがなかった。かなり遅い時間に宮子の部屋にきたときから、酒の息を察知した。鮮やかな海色のセーターを着ていたから、あれは最後に会った日かどうか。あれは寒い冬のことだったから、もつと違う日のことかもしれない。とにかく宮子は、その日の卓馬のことを思い出してしまった。コートの下から眼を射たセーターの色やアルコールの匂いに気付かぬようにして、ビールそれともブランデーときいた。卓馬はいつものソファの真ん中に座って、ああといっただけだった。どっちだろうかと迷いつつ、ブランデーの用意をした。遅い時間といつても深夜ではないので、水をいれた皿と水のボトルもそばにおいた。卓馬は黙ってグラスにそそぎ、くるくるあたたためて、ストレートで飲んだ。卓上においたきびなごの唐揚げを指でつまんだ。おつとした眼で皿の上をみ、口にはこび嚙

か、ひよつとしたら一年前だったかと思ったりすると、寒々と揺れた。胸の奥がにじむように痛む。きょうは行けない、また連絡すると電話があったときはなん回かあった。すると半年前のことだったのか。ここまで固い壺のふたを開けながら、宮子はその先へ進んで行けない。

確かなのは今週の宮子の休日もまた、なんの連絡のないまま終ろうとしているのだ。

宮子はこの私鉄沿線を三つ下った駅前の美容院に勤めて、六年になる。宮子にとってめつたにならなかつた。雇い主が一年前に替わるとき、一緒の辞めどきと考えていた。新しい雇い主はしゃきしゃきした若い三十代前の女だったから、宮子の気持ちは決まっていた。どうせ放浪の身、腕には技術があるのだから長い不景気といっても、選ばなければ就職先にはいつも困らなかつた。五年間世話になった前の雇い主は、細々とやってきた美容院経営に見切りをつけ、整理して、故郷の山梨に帰ることになっていた。それがいつのまにか遠縁だという、そのしゃきしゃきした派手な美容師を連れてきて、ここをこのひとにやってもらうことにしました。宮子さん、この店はあるあなたが長いのでこの娘をお願いしませんが、頼むわよといつたのである。経営権は残して時々様子をみにくるといふのだから、雇い主はかわらないといつてよかつた。

宮子はしばらくひきつぎのあれこれで様子をみようと思つていられるうちに、辞められなくなつた。

若い店長がしゃきしゃきと活発にみえたのはほんの数日で、美容師の実務になると、殆ど頼りなかつた。美容院でしか販売していないという化粧品も、みくだし、きびなごと言つた。うまいよとまた食べた。またたく間に皿はからになった。おなか空いているのかもしれない。眼を合せて、いつもなら笑つたりするのに笑えなかつた。先にそらしたのはたしかに卓馬だった。

宮子はこれでいい、卓馬の食べっぷりを眺められればいつも満足した。もう少し食べる、あるわよときいた。卓馬はテレビのサッカー中継に気をとられていて、返事をしなかつた。別な皿にのせた一夜干しのきびなごをからになった前の皿と取り替えた。先におろしていた大根おろしのことを忘れていて、それも小どんぶりそのまま、テーブルにおいた。サッカーの前半が終了したあたりで、皿の上に卓馬の眼がとまった。干しきびなごをがりと食べ、宮子を見た。どこで手にいれたの。宮子はほつとしていた。自分はこのときの卓馬のために生きていると、思う。けつこうあちこちで売つてるわ……とそらすように答える。いつもなら詳しく聞きたがるのに、卓馬は沈黙しテレビに戻つた。奇妙な空白の間だった。宮子は都心のデバ地下の名前を答えなかつたことを後悔しながら、ごはんはどうするかを聞けずに、立ち上がった。台所の洗いものをした。卓馬はテレビの画面にむかつて、よしよしと声を上げた。行けえーの音が、いつきため息にかわるのを、宮子は背中できいた。ゴールはならなかつたようだ。卓馬はブランデーを両手であつたためながら、テレビ画面から眼を放さない。宮子は黙ることにして、先にとりおろしていた洗濯ものをたたんだ。卓馬のものではなかつた。たたみものはあつてなく終つた。会話がなのまま宮子は台所に立つた。明日の

自分の弁当のための切り干し大根としいたけを水にほぐした。人參とこんにやくも切った。背中に動きを感じながら、卓馬が玄關で靴を履いているのに気付かなかった。煙草買ってくる。あつという間に卓馬が消えたのだ。宮子はほんやりと背中だけで見送ることになる。やがて小一時間ぐらいいして、少しほぐれた卓馬が帰ってきた。いやこのときは戻って来なかった。戻ってきたのは違う日のことだったかもしれない。そうだ戻ってきたときの卓馬はセーターではなくオレンジ色のシャツを着ていた。少しほぐれて心地よく酔っているのがわかった。ここの通り変わったね、新規開店のところでのんだら、これをくれたよ。テーブルにおかれたのは携帯用の灰皿だった。自分は持っているからいらぬ、あげるよ。宮子がひそかに煙草を吸っていることを卓馬は知っているのだろうか。自分は帰ります、また連絡するよ。ちょっと宮子の肩に手をおいて、あいまいなそぶりで帰って行った。これが半年前だったか、もつとずうと前のことだったのか。なぜこうもすべてがあいまいで、遠いのか。はつきりさせたくない気持ちで宮子を占領しているのがわかる。ああ、ばかやろうと声にだしていった。連絡なんかいらぬと、なん度もひとりごちはずだったが、あのときはあのとことして、きょうのこの日の今の気分は、まだ卓馬を待っているのではないか。

宮子は卓馬の前では吸ったことのない煙草を取り出した。自分ではまだまねごとだと思っている。ふいに煙が一筋肺へと続く気管へ下りていって、くらっとした一撃がくる。脳にくるのか胃にくるのか、肺の近くの心にひびくのか、刺激的ないい心地になる。もうふた口小さく吸って吐いて、次は大きく意識して吸った。鼻からけむりを吐き出したときは、鏡でみたいと思っただけだ。開放のなんとい気分……いい香りにつつまれた。早いとは思ったが、十五分後には次の煙草を取り出していたのだ。

何日か働き、朝起きて、ベランダの二つの鉢植えに水をやり、蜘蛛助を探した。蜘蛛助の姿はみえない。この日はどうしても見たいと思え、しつこく探した。出勤前の時間とはいえ、狭いベランダの探しものは難しいものではない筈だった。なにに蜘蛛助の姿を見付けられないまま、出勤することになった。

午後から雨になった。美容院も暇だったので、遅い昼食の時間に近くにある支所の図書館へいった。児童図書コーナーで、『蜘蛛のひみつ』という写真入りの本をみた。どうやらうちの蜘蛛助は、黄色い線がはいっているから女郎蜘蛛か、こがねぐものようだ。二冊の子供むけの蜘蛛の本をかりた。

ベランダに蜘蛛助の姿をみつけたのは、次の次の太陽の落ちた夕方だった。宮子の休日である火曜日だった。今週は続けて水曜日も休日になっていた。蜘蛛は鳥の飛ばなくなる夕暮れに巣をはると、蜘蛛の絵本に書いてあったのである。蜘蛛助はまだ網を張るではなく存在を隠すようにフチベニベンケイの葉の陰で、息をひそめていた。いたじゃないかい、元気がいと、しばし眺めた。ほんわり懐かしい思いに熱くなった。そして鉢植えの固い幹の根もとに、また脱皮がらを見付けた。拾って手のひらの上において。蜘蛛助の脱皮がらは

ないくらいの人波だった。やつとそばへ行き、視線をからませてから少し笑った。卓馬はすぐ背をかえして歩いて行く。なじみの店の方向だった。そこもまた様変わりして、チェーン店筋の酒場のふぜいに変わっていた。「どうする」と、眼が聞いてくれたので、はいつてみようよと宮子は答えた。ドアを押したときからどっと喧騒がぶつかってきた。十人掛けの大きなテーブルに横並びで座ることになった。生ビールとつまみを二点、卓馬が注文した。卓馬は機嫌がよさそうにみえたが、宮子には駅前雑踏で卓馬をみつけたときから、奇妙に重い予感をうけていた。

生ビールが運ばれてきて、ぐいっつとのどにいられている卓馬を、宮子は眺めた。先に声を発した。「なにかあったのね」

「驚くな」

「えっ……」

「転動なんだ」

「どこへ」

「どこだと思う」

卓馬が転動のあるような会社にいるとは考えてもいなかった。

宮子は茶化したくなった。「フランスかなあ、それとも、遠い南の島かしら、ふふふ」と笑った。

宮子が十代で美容師を志したとき、いつかは行きたいと思った国がフランスだった。笑って受けていた卓馬が、やがて真顔になったのを覚えていた。

卓馬はどこと答えたのだったか。あの夜は久

しぶりに楽しかった気持ちが残っているのに、卓馬はどこと答えたのかの記憶がなかった。あの夜の確かな記憶があるのに、いつのことだったかと思いだせない。昨夜のことのようにも思えるが、いや昨夜でも一昨夜でもないことは事実だった。ひよつとしたら一年前の、いやもつと前の遠い日のことではなかったか。あのチェーン店酒場の喧騒のなかで、これうまいよと暗黒いのほたるいかを口にはこぶ卓馬は記憶にあるのに、それがいつのことだったかが、確かではなかった。そして転動するといった土地、外国だったのか、地方の都会だったのか、あるいは遠い南の島の名前だったのかを思い出そうとした。そのどれにも記憶がないというのが奇妙だった。宮子は宮子の前から消えてしまった卓馬の現実を拒否したいのだからか。

その日は世間のカレンダーの連休前の金曜日で、美容院は忙しかった。遅い昼食がとれないまま、夕方をむかえようとしていた。奥の部屋で立ったままレモンウォーターのみ、梅じゃこのにぎりめしを半分かじった。パーマの客のタイマーが聞こえた。

その老年のなじみ客は鏡の中で、こういった。「週に二度、プールにいきますので、きつめにかけてくださいね」

なぜだったかそのとき、ざんざん降りの夜の夜に卓馬と初めてキスをした光景が点滅したのだった。なんとばかな。宮子は急いでそのなじみ客にいった。「どちらのプールへいらしているのですか」

なじみ客は新しくできた区立のプールのことを

細かく話しているのだが、宮子はなぜかその客と一緒にプールの水へはいつていけなかった。どしやぶりの中できつく抱きしめてきた卓馬が、ただだかつて消えなかった。あれは賑やかな渋谷の夜だった。ぐしょぐしょに濡れた深夜だった。

美容院の大きな鏡にうつる商店街の通りに、雨が落ちてきた。いっきに夕方の色は暗くなり、驟雨になった。店内の三人の客たちはいや、みつかも宮子も外をみた。

「予報が当たったわね」

みつかの客がいうと、ほんとと宮子のなじみ客も同調した。

「すぐ止むと予報はいつただけどねえ、止むかしら」

雨足はいきおいを増して、止むけはいがなかった。

宮子はどしゃぶりの渋谷の深夜の傘の中に入った。賑やかにひとが通りすぎるのに、いつまでもふたりは離れなかった。あれが初めてとすると、海辺のレストランの夜は、なん度目の待ち合わせだったのか。もうどうでもいいことだったのに、卓馬は消えなかった。

店じまいの時間が過ぎても、雨足は衰えなかった。

「予報はずれたわね」というみつかをおいて、宮子は先に店を出た。こんな雨の夜は蜘蛛助はどうしているだろうかと、ふと思っただけだった。

部屋に帰って、懐中電灯をもってベランダに出てみた。雨はそんなに吹き込んではいなかったが、蜘蛛助のすがたは見付けられなかった。

朝早く目覚めた。晴れのけはいが部屋に差し

込んでいた。宮子はバジヤマのままベランダに出た。

一つのフチベニベンケイにはかない花が咲いていた。そしてあつと声が出た。二つの鉢植えにまたがって、今までにない三角形の小さな網がはらわれているのだった。きらりと光るたくさんのお雪がえ残して、美しかった。宮子は立ち尽くした。

次の日の宮子は、仕事の終るのが待ちどろしくかった。隣りの花屋で二十センチほど伸びた朝顔の鉢植えを二つ買って、急ぎ足で帰った。

手入れをしない死んだベランダは、今までとは雰囲気を変えていた。ほんわりと呼吸をし始めたのだった。二つのフチベニベンケイの幹と葉っぱのあいだに張られた網は、さらに大きくなっていた。そのとなりに朝顔の鉢を並べた。このベランダはけつこう鳥が飛んでくる。真っ黒いからすに、植えたばかりのつるむらさきの種をほじくられ、全滅にされたことがあるのだ。少しは緑をふやして鳥たちの目から守りたかった。朝顔の葉よ蔓よ早く伸びよである。蜘蛛助のすがたを見たいと思つた。懐中電灯を照らして探した。蜘蛛助は網の中でぶらさがっていた。宮子は大きいほうのフチベニベンケイの鉢植えの土に、三箇目の脱皮がらをみつめた。こわさないように手のひらにおいて、部屋にはいった。前に拾った脱皮がらは、電話機のそばにキッチンシートを敷いて、並べていた。三箇目の新しいのも並べた。またも成長した脱皮がらだった。つやつやに黄金色で美しかった。絵本の知識では、子蜘蛛がなん度脱皮して成虫になるのか、正確にはわかっていないとあつた。その蜘蛛によって六回か七回とも、メスは九回とも書

いてあつた。成虫になるまでのなんという生命力だろう。

それにしても蜘蛛助はなにを食して、力にしているのだろうか。蛾や蠅はどうか。ベランダのガラス戸を隔てた部屋側に、季節はずれのシクラメンとポインセチアの鉢が、もはやあわれな夏姿で、色を失った葉っぱだけがだらりとしていたが、完全には死んではいないようで、その周囲には、いつも小バエが舞っているのだった。宮子はかすめ取つては、蜘蛛助の網の上にはじきおいた。ソファの下あたりから、五ミリほどのカメ虫が出てくることがあつた。今度這い出てきたら、蜘蛛助の餌じきにしたいものだ。油虫はどうか。かなりの熱量になりそうだし、蜘蛛助には美味ではあるまいか。思い出して台所の奥の古いホイホイシートを開いてみた。中くらいの死骸が二匹かかっていた。眼をつぶって割箸で取つた。蜘蛛助のためだつたらなんでもできる気分になっているのがおかしかつた。

宮子は鳴らない電話機のそばを通るたびに、蜘蛛助の脱皮がらを眺めた。八本の細く長い足のぬけ殻は美しかった。手のひらにのせてながめると、宮子と卓馬にも美しい日々があつたことを思い出した。鎌倉の海辺のレストランの夜、中華街のおこげ店で笑い合った遅い午後、この部屋で過ごしたなん年かのうちの日々が消えてくれなかつた。これなんの葉っぱなの。卓馬が口にいれて、うつと興味をぶつけてきてくれるときの眼。ときめいて宮子は答える。モロヘイヤ。卓馬がいう。初めて食つたな、西洋の野菜だろう。原産地はエジプトだって。うーんクレオパトラか、お浸しでいけ

るんだ。セロリの漬けものや鮭の切り身のちゃんちゃん焼きも、卓馬の好物だった。宮子は蜘蛛助の脱皮がらを手の上で転がした。ふつと息を吹くと、かるく転がり、手を斜めにしてゆるりと戻した。なん度も揺らしている、ぐしゃぐしゃと噛み砕きたくなつた。

暑い夏だったが、秋は意外に早くきた。朝顔はのびやかに蔓をのばし、藍色と白い花を次々と咲かせてはくれたが、種も付けずに早々と枯れていった。

フチベニベンケイの小木だけが、蜘蛛助を守つてくれていた。小木はたくましかった。それ以上伸びもせず、葉っぱのふせいも変えないまま、決して枯れなかつた。最初あまり好きではなかつたこの鉢植えが、今は宮子の唯一の味方のような気がしてきた。そうなのだ、一つ目のフチベニベンケイは、根っこむき出しで手を泥だらけにして、卓馬が握つてきたのだった。断わりきれなくてさ、花屋がタダで持つてけていうんだ、ここに置いていい、金の成る木というそうだから、どお、わるくないだろ。宮子はなぜ卓馬が花屋へ寄つたのかを知りたかつた。ああそれ、部長の定年退職の幹事なんだ、宴会当日の花東注文係。でもひどいわね、タダだからって根っこを握つてくるなんて。いやあ、どこかでなくしただけ、生かしてやつてよ。

二つ目の鉢はこのマンションの管理人からもらった。似ているのがあるなあと、マンション正面玄関の狭い庭地の植木を眺めていると、管理人は持つていつていいよ、どんどんふえて困る木なんだといつてくれた。太い幹のほうのがそれだった。

鉢ごとくられた。引越す人が鉢を置いていくので、遠慮せんでどうぞといつてくれたのだった。

蜘蛛助の脱皮がらが六個になつたとき、宮子の蜘蛛助は、メスであることを宮子は知つた。日々網張りが入念になっていくようだった。それにしても、こんなところに風に吹かれてオス蜘蛛が現れるものだろうか、現われませんよ、きつと現れません、聞こえましたか。朝の鉢植えに水をやりながら、歌うように唱えるのが癖になつた。

宮子はそれでも、やはり待つていた。卓馬を待ちつつ、蜘蛛助の網の中のドラマに出会いたかつた。

その日、店主の戸村みつかが午後になつても出勤しなかつた。前の雇い主は美容院の二階にある六畳間に住んでいたが、寝ても覚めても仕事場にいないのはいやだわといひ、みつかはバスで通えるそう遠くないところに部屋を借りていた。「ル・シエール」は完全予約制ではなかつたが、店長のみつかが予約を受けたという客が待つていた。店の電話からなん度みつかの携帯にかけても、電源が切られたままだつた。この日は宮子の機転で、なんとか一日の仕事に穴をあけることなく切り抜けたのだったが、店長であるみつから連絡がないというのが不穏だった。山梨の雇い主に電話してみようか。固定電話のそばに行きなん度も短縮番号を押そうになつては、手を止めた。次の日は木曜日だった。予定表には予約の客はなかつた。今夜だけ待つてみるか。気持ちをおさめて、宮子は美容院のシャッターを降ろし、自分の部屋に帰つた。

蜘蛛の部屋

店の電話もならなかつたが、この部屋の電話

機もいつこうにベルを発しなかつた。次の朝、宮子は早目に出動した。店の鏡の前でけろけろと笑っているみつかがいて、ああやっぱりというような光景を描いていた。そうなつて欲しかつた。だが、駅の改札口を出て右に曲がりすぐにわかつた。みつかが出勤していれば、美容院前の側溝脇に、幸福の木の大きな鉢植えが出てくるはずだった。

それがなかつた。宮子は不安になつた。美容院のブラインドは昨夜のままだった。宮子は裏口から声をあげてはいつた。

「先生、みつか先生、いないんですか」
みつかのいるけいはなかつた。店内にも二階の部屋にも、ひよつとしてとトイレのドアもたたき、開けてみた。森閑として静かな「ル・シエール」だった。こうなつたら、山梨の雇い主に電話をかけなければなるまいと、宮子は決めた。いやその前に秋山さんと連絡を取ることが残つていた。「ル・シエール」の古い電話帳は前の雇い主のときのみで、秋山さんの名前はどこにも見付からないのだった。

ブラインドを上げると同時に客がはいつてきた。電話番号を探している場合ではなかつた。

「あら、若先生はどうなさつたのですか」と客に聞かれる。急用がありまして午後には戻りません、午後の客には夕方には戻りますと答えているうちに、宮子は肝が座つてきた。なにしろ今の仕事は、自分ひとりの肩にかかっているのだった。

この日もなんとか終つた。洗濯機にタオル類をほうり込み、表において幸福の木の植木鉢を店内にいれ、ブラインドを降ろした。肝心の掃除が残

つていたが、やれやれとシャンブー台の寝椅子に伸びたのだった。明日はきょうのようにはいかないだろう。週末で予約も多く、秋山くんが出勤するにしても、そして何かが多少わかつたとして、このままにしていけない筈はなかつた。不安は連絡をしてこないみつかへの腹立ちに変わつていた。店長失格だとひとりごちた。もう山梨にいる本来の雇い主に報告すべきと宮子は、迷つていなかった。

そのときだった。裏口からぬつと風がはいつた。ひとはひとだった。あたまたに包帯をまき、腕にも巻いて首から三角巾で吊っている。声でみつかとわかつたが、とつさに言葉が出なかつた。ごめんなさいといつたような気もする。顔を歪めた。笑いのようにはみえなかつた。

「検査もあつて、入院してました」

「おやおや。そのかつこうでは仕事になりませんか」

「一週間はだめといわれました」
「きのうもきょうも、一応無事に終わりましたけど、明日は秋山くん頑張つてもらいましょ」

みつかは沈黙した。洗濯機が止まつたのでタオルをタオル専用の干しかけ台に広げながら、宮子はみつかに向かつて繰り返した。

「ねえ、秋山くんががんばつてもらつて、わたしもなんとかやりますけど」
少し間があつた。みつかの顔が歪んだ。
「秋山くん、死んじゃつたの」
「えっ」

「今夜、これからお通夜」

放心状態のみつかが片手でタオルかけを手伝おうとしたので、宮子は振り払った。

「なにがおこったんですか」

「覚えていないの」

「そんな……」

「オートバイに乗っていて、風切っていて、ぶつ飛ばされたらしいの」

「気がついたら、病院だったということですか。秋山くんはオートバイに乗っていたということですか」

「……はい。携帯はぐしゃだし、あれがないと、この番号もあなたのところもわからなくて、ごめんなさい」

みつかはいつきに声をあげて泣いた。

「ゆうべ病院で泣けなかったから、ごめんなさい」

これでみつかと秋山くんの関係がわかったことになる。最悪の結末さえつけてである。少し泣き声が低くなったので、宮子はみつかの耳もとで聞いた。

「山梨には知らせたのですか」

みつかは包帯のない手を振った。

「わたしから電話しますか」

「やめて。わたしは大丈夫だし。ほんとはね入院してなきゃいけないのだけど」

「あきれた」

「ご両親には」

みつかはまたも強く首を振ろうとして、頭を押えた。

「内緒です。一週間だけなんとかお願いします。お世話になります」

やや店長の顔になってみつかは、秋山くんの通夜に出ていった。

宮子の仕事のだんごりは早かった。翌日の予約の三人に時間調整の電話をいれ、秋山くんの客には一日ずらしてもらった。仕事が忙しくなるという緊張感は、きらいなものではなかった。

惣菜の買いものをして、宮子は夜の部屋へ帰った。台所に明りをつけると、ベランダにはいいがした。懐中電灯を握ったまま台所で立ち尽くした。卓馬だと思った。この部屋の鍵を返してもらっていないので、卓馬がこの部屋にいても不思議ではなかった。蜘蛛の巣の前でかかっている白いワイシャツの男の背中だった。あの重いガラス戸が開いたままで、頬に風を感じた。

宮子はそろりとガラス戸に近付き、からだごとぶつかった。開いていると思った戸は、旋錠もかたく動かなかった。

宮子は眼を疑った。そこにほんやりとみた白い男の背中はなかった。秋山くんの死を聞いてひとだまの錯覚をみたのだろうか。まだどこかで卓馬を待っていると、卓馬さえひとだまにしてしまった。ひよつとしたら卓馬は転動ではなくて、その死のためだったかと思ってみる。宮子は一度だけ卓馬の会社に電話したことを思い出した。長いこと待たされた上に、石野卓馬というお名前の方、当社にはおりませんといわれたのだった。定年退職した部長の名を忘れていなかったで、その名をいって、その部下でひよつとして転動しているかもしれないのですが……と聞いてもよかつたのだが、真つ暗な虚しい気分に襲われて電話をきった記憶は、卓馬の存在よりも鮮明だった。

フチベニベンケイの根もとに水を注ぐ。しゃがんで長いこと、アートのように張られた網を眺め、指で触ってみる。少し撓んでいくので指を離す。網はうつくしかった。蜘蛛助の姿は見えなかった。

ベルの鳴らない固定電話のそばに、七個の脱皮がらが並んだ。

秋が音もなく深まって、日の落ちるのが早くなった。帰宅してすぐ懐中電灯をもって、暗いベランダへ出た。どうしても蜘蛛助の姿をみたいのだった。すると巣網の下方にはばたばたしている蛾が眼にはいった。宮子は息をのんだ。このときを待っていたのだ。蜘蛛助はすばやくすがたを現わし、じたばた羽を動かしている蛾のそばにきた。蜘蛛助はたくましく大きくなっているが、その蛾は蜘蛛助よりもかさが大きい。蛾の胴体は粘り網に捕らわれていても羽はまだ自由だった。果敢に近寄っては、じたばたの蛾の羽に追いはらわれて、蜘蛛助はあとずさりする。離れたところで、蜘蛛助が獲もの様子をみているのがわかる。またすぐ、するすると蛾のそばにいつては戻りをしてるうちに、蛾のばたばたが弱ってきた。一瞬だった。あれが毒液の出る蜘蛛助の口なのだろう。いつきに食らいついて蛾の息のねを止めたのだった。あつけなく蛾の大きな羽が動きをとめた。蛾に食らいついている蜘蛛助の下あたりがだ液のぬめりのでひかっているのがみえた。

蜘蛛助がその蛾の半分を餌食にしたときだった。と、宮子はそれに寄ってくるもう一匹の蜘蛛をみたのだった。うちの蜘蛛助よりもからだの細いオスがいつのまにか、住んでいたのだ。宮子は

宮子は夜のベランダで、もう一つの現実をみた。懐中電灯をかざした。蜘蛛助の張った巣網に大きな穴が空いているのだった。ほんやりと確かにみた白いひとだまとなつて、あいつがやったのかと、寒くなった。蜘蛛助を探したが、みつからなかった。遅い晩飯を並べて台所の椅子に座った。

いろんなことがあり過ぎた一日だった。空腹にビールをいれると気分が落ち着いていた。あの白いワイシャツの背中とぼっくり開いた蜘蛛助の網が、頭から離れなかった。宮子はビールを飲みながら二本の煙草を吸った。落ち着いてくると、大きな穴のあいた蜘蛛助の巣網は、ひとだまのせいではなく、烏にやられたのだと思った。昼のうちよくこのベランダにやってくる烏が犯人なら、蜘蛛助には大変な事態だった。

次の朝、少し寝過ぎた。頭がうっすらと痛かったが、すぐベランダへ出た。いやガラス戸を開ける前に宮子は立ち尽くした。ゆうべばかりと破られていた大きな穴は修復されていて、今までもない大きな網になっているのだった。しかもそれはまばゆいばかりの金色なのだった。宮子は感動した。蜘蛛助の姿は見えなかったが、この大きな網を見ただけで充分だった。

みつかも秋山くんもいない美容院は、忙しかった。宮子は働いた。その週の火曜日と水曜日が休日だったのが幸いだ。木曜日の午後、店の固定電話が鳴った。美容院ル・シエールでございましてと受話器を耳に当てると、向こうの声は、忘れてはいない山梨にいる雇い主だった。みつかの約束通りいいわけは用意していたが、こういって繕いは苦手の宮子だった。時候のあいさつを長びへ姿を消した。

その深夜のことだった。脱皮がらのそばの電話がなった。宮子が照明を消してベッドに横になつたところだった。卓馬のことを忘れていたが、胸をつかれたのも嘘ではなかった。

ゆるりと受話器を耳にあてた。みつかだった。おびえているような細い声で、遅くてごめんなさいといった。タクシーできました、今晚泊めてくださいといった。あなたの部屋のドアの前にいます。ドアを開けて眼をみはった。みつかはパジャマ姿のまま大きなスポーツバッグを背負っている。

どこまで驚かせるひとなのかと思いつつ部屋にいられた。

「眠ろうとすると、ドアをたたかくひとがいるの、怖くて、あたしの部屋から美容院の二階にきたのだけど、そこもだれかがふわふわ飛んでいるように、眠れないの」

みつかはそこでひとしきり泣いた。声もなく泣いた。

「秋山くんだと思つくと怖い。ゆうれいはいやなの」といつて、またみつかは肩を震わせたのだった。

「ゆうれいってやさしいっていうわよ」

「でもいやなの、秋山くんは好きだったけどゆうれいは怖い」

宮子はこのベランダでひとだまをみたことを思

い出した。みつかにはいわなかった。ここでみるひとだまは秋山くんではないのだから。
 その夜のみつかは、ソファをベッドにして休ませたのだが、いつのまにか宮子のベッドにはいつてきた。ごめんなさい怖い。宮子にからまるようにして眠った。みつかの深い傷はまだなまなましかった。宮子は眠れず、朝方少しだけまどろんで起きると、みつかはいなかった。台所に書き置きがあった。
 「きょう、山梨のおばさまが出てきます。万事よろしく。三人でおいしいもの食べに行きましょう。FC・電話のそばのミイラはなんですか」
 宮子は声を出して笑った。みつかにはいつの日か蜘蛛助をみせたいと思った。ゆうれいと同じように、怖いといったら困るが、それも面白いような気がした。宮子の脳裏には冬を越した蜘蛛助の卵囊が、春になって二つにわれ、次から次へと小グモが孵化してくる光景が、恐ろしいほどくつきりとみえているのだった。ああ、そのときのこの部屋はどうなっているのだろう。次から次へそして次へそして次へ……。燦々とした春のひかりのなかで、宮子は立ち尽くす。



谷口葉子

たにぐち ようこ
 1937年サハリン生まれ
 盛岡白百合学園高校卒
 シナリオライターを経て、「作家」同人のあと、現在「カプリチオ」同人第13回婦人公論新人賞佳作掲載
 「失語」で第17回作家賞受賞
 著書『毒の祀り』（有朋舎）『いよよ華やぐ』（有朋舎）『草の声』（創樹社）

小説と評論
カプリチオ
 2007年冬 第26号

古本屋のアルケオロジー……田村 治芳
 蜘蛛の部屋……谷口 葉子
 夕映えの時……川口 明子

同人雑誌紹介

カプリチオ

東京都

不定期構想とゼイタク感覚

一九九三年。まさに世の中は世紀末だった。名古屋で勇を誇っていた一つの同人雑誌の中心人物が亡くなり、組織が変わりはじめ、まだ落着かない状態のなかで、誤解からくるいくつかの軋轢の噂が尾を引いていた。それらと関係あるようなないような、四十代、五十代の数人が、他の同人誌仲間も集めていつの間にか読書会や講演会などの形式で会っているうちに、なにやら本でも出すかということになった。

そして、誰言うともなしに、同人誌上に自腹を切つて小説を載せるという行為は、土台、大変贅沢な道楽なのだから、思い切つて贅沢をしないかとなり、ただ文字だけをひたすら並べるような慎ましいものでなく、表紙もカットも編集上も存分にゼイタクなものにし、その上内容も、同人たちが気儘に書き上げた作品を溜めておいて、随時仲間が読み廻し、これならばと思つた作品が適量に集まったところで不定期に発刊する。間違つても原稿が足りないと言つて、無理に書き上げるなどという愚行はやらない——てなことで話が纏まつた。一九九三年十月。黒人の女性歌手がブルースを歌っている多色刷り表紙のカプリチオ創刊号が



編集委員のメンバー。前列左が谷口葉子

発刊。「カプリチオ」とは奇想曲、狂詩曲の意。発行は二都文学会（東京・名古屋）である。
 一号、二号と続いた。誰もが続けようというベクトルの考えを持っていなかったから続いた。どの方向へ進もうと誰も考えない、勿論、年何回出そうとも、いつまで続けようという議論もなかった。ただ広告料をやや多く出してくれる熱意のある同人がいて、その金でいろいろな特別企画のページがつくれた。これが雑誌をリトルマガジンに展開させた。時には、広告料が余つたのを蓄積しておいて六七頁の特集タルホ感覚嗜好症―稲垣穂について―を展開できた。（本体一四四頁）
 いつの間にか二十七号になり、同人も五十数名になつている。最初は始めたメンバーから一人消えただけで後は、みんな元気だ。
 好きな時に好きなものを書き、皆の間を廻し読みして、それなりに作品が集まつた時に出すという不定期構想は基本的にゼイタク感覚といつしよに続けている。
 あい変わらず、同人の誰も続けようとは思っていない。原稿が集まらなくても心配している者がいない。不定期な本だからである。でも熱心に小説は模索している。（文責 関谷雄孝）

二都文学の会
 〒156・0044
 東京都世田谷区赤堤一・一七・一五
 ☎03・3713・7962

風景

——イヌイットの皮袋——

山口 馨

その少年とは以前にも何度か会ったような気がする。

都心から自宅に向かう電車の座席に久し振りの雑踏に疲れの出た体を島津は預けた。見るともな

りかかるように立っている姿に視線を留めて、ハテと小首を傾げた。

平日の、午後三時をいくらか過ぎた頃合だ。朝夕なら望むべくもない空席が何ヶ所も散らばっているのに見向きもしない少年を、不確かだがここ数回は目に見えていると思う。勿論以前は、なんか白っぽい服装の少年が目を掠めたという程度のこと

で、しっかりと見たわけではない。

この電車の利用者は老若男女取り混ぜた勤め人が大半で、曜日や時間帯によっては催事に出かける人や買い物や観光目的の客がひっきりなしに乗降するが、子供は減多にいない。この路線では見かけることの少ない年頃だ。しかも一人で。手ぶ

なかつたけれど、環境が変わってみればちよつと新鮮ではあった。世の中と繋がっていることがここにもある。取り立てて言う程もない小さな慰め

だった。

ただその時、フリーになってからの一回目の案内を貰った時には、それに応じられるような家庭の状況はなくてパスした。だから、起算したのがどの時点かは詳らかではないのだが、二回目十日くらい前に郵便受けに入っていた。

歯の具合を訊ね、健康のために定期的なチェックを、と勧めている葉書を、「商売上手なことだ」と、大した邪気があるわけでもないが憎まれ口をたたいてダイニングテーブルに放ったまま忘れていたのだ。それが数日して、片付けないままの鉢や皿、乱雑に置かれた調味料の壺などの陰に、食事場所にそぐわない紙切れがあるのが目に入った。

歯の具合を訊ね、健康のために定期的なチェックを、と勧めている葉書を、「商売上手なことだ」と、大した邪気があるわけでもないが憎まれ口をたたいてダイニングテーブルに放ったまま忘れていたのだ。それが数日して、片付けないままの鉢や皿、乱雑に置かれた調味料の壺などの陰に、食事場所にそぐわない紙切れがあるのが目に入った。

医院に何人かいた若い歯科衛生技士の手になるのか、花のイラストが刷り込まれた色付きの葉書のメッセージに、ふと気持ちが悪くなった。このところ歯に不具合が募っていたからだろう。心配されているのかも知れない、と手前勝手な想像が湧いた。何であれ誰であれ、擦り寄りたい心地になつていたせいもある。

なにしろ、歯医者に通うようになったいきさつがいささつだつたから……。そう、あの時から翳りが差したのだ。いや、気が付いていなかった翳りに無理やり向き合わされたようなものか。大仰に表現するなら、生きる活力のレベルがジワリと下がっていることに。

指導書なる二枚の紙に目を当てて、そもそも歯

らで。どうしたって違和感があった。

少年は窓外に視線を遊ばすでもなく、扉に斜交いに向けた体から首だけを捻って、どうやら軽く伏せた目蓋を時折上げては島津の方を窺う気配があった。不思議に、そんな取るに足らない微かな動きというものは伝わるものだ。見られているのかな、と不意に感じてから落ち着かない心持になつた。

白のポロシャツにグレーのズボン。シューズにだけ何本かの細い色線が走っている。変哲のない身なりだが、それが逆に目を引く。顔立ちの幼さから十才くらいかと思当をつけて、その年頃の孫を持つ知り合いや息子のいた部下を片端からなぞってみるのだが、もとより私的な付き合いの多い方ではない。心当たりはすぐに尽きた。島津にも孫はいるが、一人娘の遅い結婚で、まだ二才になつたばかりだ。

気にするからだろう、視線の飛んでくる右肩か

医者のお世話になるようになったのは、と島津は顔をしかめた。馬鹿な部下の頭突きのせいだ。

自慢にもならないが、部長職に就くような年令まで歯医者の門を叩いたことがなかった。ごく普通に歯磨きをするだけのこと、トラブルを起こしたことはない優秀な歯医者の

それがあの日、タイミングが悪かったとしか言

い様がないが、仕事上のミス指摘しようと部下の机の脇で屈めた顔面に、「申し訳ありません」と失敗に恐縮しきつて急に立ち上がった男の頭がぶち当たった。

部下も痛かつたらうが、こちらのダメージの方が大きかった。弾みで何歩か後ろに飛ばされたし、隣の席の椅子が大きな音を立てて転がった。背広の胸に垂れた鼻血は床まで汚し、外れて落ちた眼鏡はレンズが壊れた。右上の歯は、これはもうてっきり折れたかと危ぶんだほど激しく痛んで、口を押えて蹲ってしまったから、フロアの人間のほとんどが何事かと立ち上がる派手な場面となつた。これが顎にまともに当たって舌でも噛むようなことにでもなっていたら、とんでもない修羅場になりかねなかつた。

結局、歯はグラつく程度にとどまったが、会社近くの歯医者へ駆け込み、抜歯処置をしてもらわなければならなかつたのだ。そして部分入れ歯の世話になることに。歯科との付き合いはそれ以来になる。

もつとも、当時も医者に言わせれば、丈夫だと

てんから疑うことになつた歯が意外と脆くて、

そういう状態に陥つたのは、既に歯茎が相当弱つ

ていたからだ。更にご丁寧にも、こんなことで

ら首にかけて妙な強張りが出てきそうだった。用があるというのなら声でもかけてくればいいのだ、と突き放すような気分になつて体の向きを変えた。目をつぶって電車の揺れに体を任せていれば、浅いとしても二十分程度の眠りはとれるだろうと腕組みをした。

組んだ腕の下の胸ポケットでカサリと音をたてるものがある。先刻歯科医の支払い窓口で渡された紙片をぞんざいに突っ込んでいたのを思い出した。

仔細に目を通す気なぞなかつたのだが、視線を意識するものだから、いかにもの勿体をつけて取り出してみた。広げると、領収明細の他に「歯科口腔衛生指導」と「歯科衛生実地指導」が添付されていた。

勤め人でなくなつてからも歯医者からは在職中と同じように半年に一度の案内が届いていた。当初から自宅に送られていたのだから驚くことでは

も起きなければ、気がつかないままある日突然、歯が用をなさなくなることであり得たと付け加えた。

それは多分に脅かしではあつただろうが、妻に口臭を注意されたことも何度かあつたのも確か

で、素直に肯けないまでも受け入れるしかなかつた。つまりは歯周病がかなり進んでいると診断されたのだ。

部下の、封入書類の取り違えという何ともお粗末な仕事で会社の信用が損なわれるところだつた。取引高に応じて変動させてあるマージン率の書き込みが、悪くすれば別の取引先に知られてしまふ怖れさえあつた。

誤送先が幸い好関係にある別業種の客だったから書類が返送され、事なきは得たものの、この不祥事は露わになつた。そんなつまらぬことでも最悪の場合、責はその男の上司である課長と、当然部長である島津が負うべきところだつた。

それがこの小さな事故で様相が変わつた。地方支店に再教育の名目でその部下を送ることで一件は収拾された。

若手育成の一環として営業支援で地方の現場を経験させることは人事部のものとの方針だから、たとえこの異動に疑義を挟む向きがあつたとしても島津が矢面に立つことからは免れる。だが、それが通常の異動の時期として適当だつたのかどうかまで考えると、後味は決して良くはなかつた。怒りの持つて行き場がなくて、それこそ奥歯にもののはさまつたままのような不快さと、一方で人知れぬ小さな負い目が残つた。

苦い思いが過ぎるだけだ。だからこのことに連想が働く都度、つい眉をひそめることになる。

半年に一度の定期検診を受け始めて何年になるのか。歯の動揺度を測り、歯茎の後退程度を調べ、歯垢を取る。場合によっては歯石を砕く。煙草はやらないから歯の汚れは少ないはずだが、それでも歯の表面には茶渋のようなものが付いてしまいうらしく、洗浄というか清掃してもらおう。

そんな医者通いを、どうしても健康談義に話題が流れる同期生との酒の席で笑われたことがあった。

「馬鹿な」と中の一人が言った。

「歯石を取ったりすれば、歯に隙間ができて食べ物が挟まり易くなるじゃないか。かえって良くないんじゃないの。俺なら断るよ、そんなの」

煙草が止められない男のヤニで染まった薄汚い歯は、いい見ものではなかった。その強弁は聞き難かったが、島津はあえて医者の受け売りをする気にはならなかった。歯石が付き続ければ歯根を侵し、歯を脆くする。しばらく会っていないあの男の口は、その後どうなっているだろう。

ともかく気が向いたからにはと、ためらいながらも予約の電話を入れた。午後二時と指定されて先週から四回目になる。

勤務した商社は準大手だったから、役職定年が云々されるのがやや遅かった。島津は時勢の間隙を縫うことが出来たと言えろ。六十才まで居続け一旦退職し、かねて約束の子会社のポストに横滑りした。

新しい勤務先は、取扱製品が限定されていて

が下がってでも働く意志があり能力が評価されれば、数社ある子会社のどこかには移ることができた。

当然のように島津はその道を選んだ。外向きの仕事に性に合っている。一年毎の契約になるが、それは取るに足らないことだった。

島津には客先との人脈がまずあったし、とかく後手になる子会社の若手営業マンの指導も期待されていた。三年はいけるだろうと想像したし、実際そうだった。

「あと三年は働くよ」

定年を目前にした時期に妻に告げた。「そう……」とだけ言っただけで溜息をついたことを、今になって島津は思い出す。母が自室で一人で摂る食事の盆を運ぶところだった。即座に夫婦が話し合うのに相応しい時間帯ではなかった。そこを選んだ。

「三年、もつかしら？」

ダイニングを出しなに冴子が咳くのが聞こえた。

「亭主を見損なうんじゃないよ」

妻の背に向かって島津は笑いかけたが、応答はなかった。「もつ」に含みがあることは匂わせたが、夫が決めたことに口を挟みはしなかった。冴子はその時ですら疲れていたのだと島津が思い当たったのは、ずっと後になってからだ。

素早く冴子を見つめたつもりだが、冴子の本音のところは島津が不明だったわけではない。だが何とか頑張ってもらおうしかない。自分も仕事に出るのだから。生活を支えるための労働を厭わない

会社の規模は小さいが、その分、要求される業績数値への評価が厳しく、気が抜けなかった。

いきおい、家庭のことはおざりで、妻に任せ切りになっていった。田舎から呼び寄せて二年になる母との三人の暮らしに忍び込んできた軋みは薄々感じながらも、先延ばしにし、何とかなるさと楽観する気持ちもあって、手を打つことなく放置して三年が過ぎた。

親会社とはビルは異なるが、同地域の一角にその会社の社屋があった。医者が入居しているビルともそう離れてはいなかったから、案内があれば息抜きがてら出かけて行く。もとの勤務先ともさほど距離がないわけで、かつての部署の人間と事前に連絡を取って昼食を一緒にして世間話を交わし、誘われれば夜の街にも繰り出す。

だが勤めを退いてほぼ一年になる今回は誰にも連絡する気にならなかった。医者に向向くことさえ、愚図愚図と先送りしていたのだが、嘔み合わせの悪さはどうにも我慢ならなくて、止む無く腰を上げた。固いもの、弾力のあるものが噛み難くなっていったし、時折どの奥歯かがひどく疼くこともあった。

「口腔衛生指導」の病名欄には、慢性歯周炎。にチェックが入っている。島津は合点していた。歯の浮きは、歯磨きがいい加減になったせいだし、それは生活の乱れから来ていると。指導書には見透かしたように、規則正しい食生活の項目がある。

そして今回はどうとう、なりかけの虫歯も見つかった。その治療に数日置きに通うことになり、取り敢えずは治療を終えたところだ。

夫に文句のつけようがあるか？ 論法に誤りはない。島津は用心深く家庭の中のわだかまりを脇にずらした。

「島津さんじゃありませんか」。その声をかけてくれる誰かが現れることを気持ちのどこかに持ちながら、医者への道筋を少し膨らまして、親会社の前を往復してみた。

若い社員が足早に出入りし、携帯でせわしなくスケジュールの打ち合わせをしながら小走りに駅方面に向かう者もいる。このビルだけでも社員は千人を超えているが、代替わりが進んでいることは承知している。島津の年配になっては、例えば社屋周辺であったとしても、知り合いと出会うことが簡単な訳がなかった。

電話を一本すれば済むことだった。だが、掛けなければ何も始まらないという現実があった。ほこの一年、会社の関係者とは没交渉だった。そうならざるを得ない事情を家に抱えていたにしても、無理にでも戸を開けて入ってきてくれる人間がいなかったことに島津は傷つき、大人気ないがいじけてもいた。他人を拒んだのではない。応じることができなかつただけだ。

承服し難いことだが、もう疾うに遠ざけられ、この活気に溢れたビジネス街の住人では既になんことを、島津は認めざるを得なかつた。いい年をして、寄る辺なく心が揺れ、人恋しさが募るのを洪面に隠した。

乗換駅が迫っていた。自宅のある郊外に向かうには別の電車を利用することになる。何十年、そ

帰りがけに医師が「定期検診は三ヶ月に一度にいたしましょう。短いスパンで見せてください」と、口調は平らかだが断定的に告げた。歯なんぞの状況すらが下降線に入ったと、島津には思えた。自分を取り巻く環境そのものに連られたかのよう

に。いくつか駅を過ぎた。紙片を畳みながら目を上げると、乗客に出入りがあったようで車内の色合いはどことなく変わっていたし、もう空席は見当たらなかった。

少年は同じ位置にいた。前や横に立つ人で姿の大部分は遮られていたが、電車の揺れ具合でこちらに向けた顔は見えた。どこか変なところでもあ

るのだろうか、島津はさり気なく自分の服装を点検した。

今朝おろしたばかりのカッターシャツはキツパリと白いし、ネクタイに染みが浮いていることもない。濃紺の背広は少々若めだが体に馴染んでいる。バッグの一つも抱えてくればよかったのか……。

連絡は取って取らなかつたというものの、会社の近くだ。誰に会うかわからない。誰であれ、相手に見くびられるような身なりは避けなければならぬ。そんな気負いに我から苦笑しつつも、たかが歯の検診に、背広にネクタイで出てきていた。久々に念入りな歯磨きをしたし、髭も丁寧にあつた。

子会社に降りて三年間、同じような業務に就いていた。分社化が進むことで、振れ現象というか、部門によっては人手不足が生じていたから、給与う、ほぼ四十年、繰り返した通勤のパターンだ。同じホームに別の会社の電車が乗り入れている便利さで、親しい駅でありながら降り立つたことはない。ほとんど、点と点を結ぶだけの数十年だったんだなあと今になって呆れている。ただの会社人間、と誹った母の悪態を忌々しく思い出した。その通りだったということなのか。

仕事をするのしか知らない、面白味の欠けた子だと母に決めつけられていたものだ。結構じゃないか。家庭を持ち、子供を育て、独り立ちさせる。それが出来れば充分だろ。そうそうぶいたのが反感を買ったのか。それとも単に、親子ながらに相性が悪かったのか。

島津が郊外とは言え、都内で一戸建てをようやく構え、一緒に住もうと誘った時にも母は郷里を離れようとしなかつた。借りた店舗で小商いを営む兄一家と暮らすのだと。

兄が、興した事業の失敗で父から継いだ家屋敷を人手に渡さざるを得なくなつた時、島津はまだマンション暮らしだったが母を呼び寄せようとした。兄は消沈し、どこか意気地のない男になっていた。肝臓を患ったのも酒に逃げようとしたから

だ。以前は人に貸していた住宅を応急に改装して惣菜を扱う店を始めたのは兄嫁の才覚と働きだった。何程の補いにもなるまいに、母はそんなになつた兄たちの傍に居続けようとした。兄、勝の健康に不安を抱えての生活を援けたいと、母は期していたのか？

島津の目からすれば、その頃でももう八十才に

手の届く年令だった母の判断は危なっかしく映った。兄はともかくも、兄嫁はどう考えているのか。母を引き取る事ができる。一戸建てなら文句はあるまい。準備しよう、と決心した。

島津の感覚では都会で家を持つ、しかもそれが一戸建てだということは大変なことだった。凄いいことだった。それを実現させたことで、社内でも人々に羨ましがられ、もて囃されたことか。それが母にはわかっている。「誠はようやった」と褒めるには褒めるが口先だけだ。毎日の臭いをどうしても感じてしまう。ならば兄が母に何をしようとしたのか。

どうあれ母に誘いを断られるとは予想していなかった。意外だった。母のための部屋を準備してあった。弱る足を見越して予め段差のない造りにし、玄関にはスロープまで設けて万全を期した。速い将来の自分たち夫婦の暮らしまで想定して。

庭のとれる大きさの敷地を物色するのに近郊をどれだけ回り、時間をかけたことか。そこまでしたにも拘らず、母は来なかったのだ、兄が逝くまで。

そろそろ電車が止まる。急に、違うことをしてみたくなった。「外に出てみるか」。口の中でそう呟いた時、あの少年も明らかに降りる意志の見える体勢になって、扉の前に立った。

「ほう」と思った島津の顔を、振り返った少年の目が今までは幾分はつきり捉えたような気がした。「付いて来なさい、つてか?」。島津は少年

今朝、珍しく庭仕事をした。ゴミ出しに表に出た時に、隣の奥さんから「お宅の椿に虫が」と知らされた。「どんどん増えますよ」と、そこそこ害虫を噛み潰したような口元で脅かされて、歯がしていた作業を思い出した。

確か、チャドクガと言っていた。名前前からして禍々しい蛾の幼虫が椿に付くという。一度などは気が付かないで葉に触れたとかで腕を腫れ上がらせていたものだ。挙句に、数本の椿は何とも見事に裸木と化していた。葉裏にビッシリとしがみついた幼虫に食べられてしまったのだ。

島津はほとんど庭に立たなかつた。仮に時間があつても、積極的に手伝つたことはない。せいぜい伸び過ぎて伐つた枝を束ねて運ぶ力仕事くらい。だが、歯子が不在とあつては手を打つておかなければと、かつてないことだが動く気になつた。

庭仕事用の大して量のない道具の中から、うる覚えで薬剤散布に歯子が使っていた器具を取り出したが、当の薬剤が見当たらない。街へ出たついでに買うことにし、折角庭に降りたからと、素人目にも煩く繁つた枝に銕を入れたりしたのだ。

朝、歯子がなかなか起きない。「おい」と声をかけると、ゆっくり上半身は起こすが背を丸めたまま放心している。

「眠いのなら、もう少し寝てろ」

「いえ、起きます」

「どこか具合が悪いのか」

「いえ、今、起きます」

そんな朝の遣り取りが何日か続いていた。動作

の背に向かつて歩き出した。

乗り換えるのか、それとも街に出るのか。いずれにしる、後ろからついて行ってみよう。どういう子なのか。何故俺を気にするような素振りを見せていたのか。もしかしたら何らかの理由があつて俺を誘っているというのか。

少年は町へと歩き出していた。出札口で切符を差し入れていたから、通学とか塾通いとは関係はないのだろう。

駅前の小路を慣れた足取りで進んで行く。五月半ばとはいっても街の人の服はまだ明るい色ではないから、少年の白っぽい姿は人混みに紛れることがない。間口の狭い本屋や軽食屋、生活小物を扱う店が並ぶ通りを、よそ見をするでもなく少年はずんずん行く。

大通りに出た。車の往来が激しいから主要道路の一つかもしれないが、島津には特定できない。角に交番のある交差点を渡り、右折して木立の鬱蒼とした一角に入った。長い煉瓦塀が続いているのが遠目にわかつたが、信号を一回渡り遅れた島津は、何故だか急に駆け出した白い姿に焦つた。体力には多少の自信はあつたのだが、このところからきし駄目だ。自堕落な気分もせり上がつてきて、かえつて歩調を緩めた。

気にならないではなかつたが、どうでもという強い気持ちがあるというのでもない。見失つたら見失つたでいいさ。

かなり先で、小さな白い姿がフツと消えた。どうやら塀の切れているところがある、と踏んだ。そこまで行けばわかるだろうと読んで、目的を持たない人間の歩き方になつた。

がのろく、家事が捗らない。話しかけても答えが頓珍漢だったり、反応が鈍かったり。それこそ何となく作つていた定番の料理の味が、日によつて変わつていたりした。

夜中に何度も目を覚ますから、ぼんやりするのはそのせいかもしれない。本人も「お母さんにつきあつたのが癖になつたのね」と軽く考えていたようだが、一向に改善の兆しが現れなかつた。

尋常ではないなと感じてはいたものの、ほんのひと月前までの、母がこの家を去るまでの数年が緊張の日々だつたことを思えば、自分もそうだが歯子もつと気抜けがしているからだろうと高を括るところもあつた。

三十才で社内結婚し、来年には三十五年目の記念日を迎える。不機嫌だつたり拗ねていたりで会話にならなかつた回数も数知れない。相当な亭主関白だつたらうとの自覚もないではないから、堪えたことの多さは歯子が圧倒的にはない。

殊に、娘を嫁がせ二人きりの生活がしばらく続いてきたところに島津の母が加わつてからは、気遣いに加えて我慢することも少なくなつた筈だ。

母のために無理をして建てた家によく迎え入れたのだから、当座の不協和音は覚悟していらろうし、充分納得した上でのことであつたにしても、日がな一日姑と顔を突き合せていては夫には言えない辛さを溜めてもいただろう。

柄の長い銕で適当に枝を払つていて島津は、つと動きを止めた。この辺りで歯子は膝を崩してへたり込んでいた。眼は開けているが何も見えないようだつた。体のどこかが痛んでいるという風

程なく、森に向かつて誘い入れるように開いた門の前に着いた。さて、と思案にもならない思案に付んで、惚けたように口を開け治療したばかりの歯のあたりを舌で弄つた。噛み合わせの悪い左奥歯の一本に虫歯ができていたが、念の為に撮つたレントゲンで歯根が甚だしく痩せているのが明らかになつた。

「何年か先には抜くことになるでしょうが、できるだけ長く保たせる努力をなさってください」そんなことも医師に言われている。

少年はどっちに向かつたらう。門の内側、三方に分かれてそれぞれ奥へと延びている道の、一番広めを取り敢えず選んで歩き出した。その先に自販機らしきものが見えたからでもある。

ペットボトルの茶を買い、近くのベンチに腰を下ろした。おかしなことをしている、と、訝しみながらも、木立の中で寛いでいるせいも、やんわりと和んできていた。

「緑はいいなあ」
独り言にしては大き過ぎる声を出して、空を振り仰いだ。どの木からか、ゆっくり葉が舞い落ちていた。

随分前になるが、同じような季節、風のある日に歯子と二人で落葉の中を歩いたことがある。「この時期にか?」と驚く島津に、「春に葉を落とす木もあるのよ」と妻が教えてくれた。椎とか樫とか……。楠とも言つたかもしれない。

今、周りに葉を散らせているのが何の木なのか、島津にはわからない。が、このことを知っているだけでも楽しいのだから、と新しい発見をしたかのような気分が差していた。

でもない。怪我ではない、と一安心はしたが急に不安に襲われた。歯子の中で何かが毀れた、と。日に一度は庭のどこかを手入れする日課を、体調が思わしくないと滞つていて、何日か振りで草むしりをする外に出たのだ。昼時分になって、部屋に戻つていないのに気がついた。迂闊だつた。

三時間は経つていたらう。
引き摺るようにして家に運び入れ、濡らしたタオルで顔を拭いてやると、歯子の目から涙が流れ、笛のような音を喉から絞つてしゃくりあげた。

「どうすればいい?」
不甲斐ないことだが、思わず娘の奈緒子に電話をしていた。

「診てもらわなくちゃだめよ。すぐそこへ行くから。心配ない、心配ないって、お母さんを落ち着かせてね。あ、絶対に一人にしちゃだめよ、お母さんを。もしかしたら……」

「もしかしたら」、に続けて言おうとした言葉を奈緒子が飲み込んだことが島津にもわかつた。もし、歯子が一人きりの時にこれら起きていたら、と想像すると足が震えた。歯子の右手に握り締められていた草刈用の鎌の刃が、何度も目の裏に刺つた。一緒にいてさえ手の施しようのなかつた自分が恥ずかしく、心細さも加わつて体が竦んだ。

翌日、奈緒子に伴われて行った心療内科で入院を強く勧められた。

母が去つたことで、歯子に負わせていた荷は軽くなつた。妻をいくらか薬にさせてやれると胸を撫で下ろしていた矢先の出来事だつた。

島津は家に、一人残された。

田舎の家にも屋敷林があつて、子供の頃は兄や近所の子供たちとよく木に登つたものだ。座敷に面した側の庭木には登ることは言うに及ばず、近寄ることさえ禁じられていたが、それ以外は咎められることはなかった。

兄はしばしば、キッチリ設えられた表の庭に大人の目を盗んで仲間と侵入したが、櫻や檜のある裏庭の方が島津は好きだった。伸び伸びとして大らかだった。丁度この森のように。

兄はいずれ自分のものになるあの庭を子供ながらに誇示したかったのか。それをも手離すことになつてさぞかし臍を噛んだことだろう。後ろめたさが付き纏うが、兄を思う時に薄つすらとした憎しみが混じる。何もかも失うことで兄は独り占めしたのだから。

島津の今の家の庭は、かつての柘榴や無花果まで実つていた裏庭の五分の一もないが、雑木に占められている。せまい敷地だから日当たりやら、近所迷惑にもなる落ち葉の始末やらで大きく育てることはできない。しかし、ささやかな緑に気持ちを解かれることは多かつた。

「あ、するとこれは檜の葉かな」

目の前で葉を落とし続けている樹を見上げて、小さく舌打ちした。いい加減なものだな、と、また苦笑になつた。昔親しんだものを忘れていた。旋回しながら落ちて来る葉の一枚を追つていた目に、繁みに半ば隠れていた白い表示板が映つた。「標本館」とある。矢印の示す先を覗き込むと、遠くに窓ガラスを光らせた建物が見えた。子供の行きそうなところだ。駆け足になつた理由が領けた。目当ての標本館が近くなつて、少年は気が急

いたものらしい。

「昆虫か？」

咄嗟にはそれしか思い浮かばなかつたが、貝か、鉱物か、植物か。それともひっくりくるめて全部？興味を湧いて立ち上がった。どこに向かつたのかハッキリした以上、慌てることはない。あちらこちらと目を遊ばせながら、木立の道を辿つた。

資金の無さが致命的で、何度かの起業の望みも適わず、不本意な後半生を送つた兄が六十才で亡くなつた。二つ違いの兄の早過ぎる死だった。肝臓の慢性的な障害は、お定まりの終幕を兄、勝に準備していた。

葬儀の後の直会で母に声をかけた。断られることを予測しつつ、「来ないか」と島津は誘つた。すると、三度目になる誘いを、母は何の拘りもなく受けたのだ。あまりの呆気なさに、逆に肩透かしを食わされて、居合わせた者は互いに顔を見合させたものだ。

「いいよ。誠のところへ行きますよ、勝さんの四十九日が過ぎたら」

前二回の拒みや、兄嫁への慮りから切り出しかねていた島津に、母の方から話題を振られての持ちかけだった。母は、母の頭の中に描いた設計図に従つて動いているようだった。真意がどこにあるのか島津は計りかねた。

自分が空回りしているのではないかという疑いが島津の脳裏を掠めていた。本当のところ自分が母を思うほど、母には顧みられてはいないのでないかと。

暗い道ではないからと連れ立ったら、結局それも習慣になつた。

そうして母は次第に別の人になつていった。休日、島津が居間でテレビを見ている姿を認めても無視して出かけようとする。阻んでも、駄々をこねるか不貞腐れるかで玄関から動こうとしなかつた。二重に掛けた鍵を外すことができなかつたから、座り込んで意志を通そうとした。夜の散歩も時知らずになり、母の生活に組み込まれた。

夜中に目を覚ますと、もう体が動いていく。牙子に気配で起き出して、しばらく母に付き合う。夜中は流石に暗くて様子が違うと思うのだろう、そこそこで戻つてきたし、毎日というわけではなかつたけれど。

体に弱りの出てきている高齢の老人が相手とは言え、自分も六十才に近い年令で生活を共にし始めたのだから、牙子の心労は大抵のことではなかつたが、母と暮らしたいという夫の望みに応えようとしてくれた。島津も感謝の気持ちを忘れはしない。仕事に熱中するのも、それを思えばこそだ。

だが、島津が関与れない日中の様子を推し量つてやるまでの器量がなかつたのかもしれない。延長した勤めからも退いて、さてこれからと島津が家庭を眺めやつた時には、母はもう目の前に居る男が息子だということすら、しばしば呑み込めない老人になつていた。

しばらく前から、島津を「勝さん」、牙子や時々やってくる奈緒子を「久美さん」と呼びかけることは間々あつた。久美は兄嫁の名だ。誰にだつてあり得る呼び違えだと思つていた。年寄りなら尚

子供の頃から、母の顔はいつだって勝に向けられていた。普通なら下の子の方を構つて、兄なり姉なりが憎気するものだが、それが違った。兄だけが可愛いのだと何度怒りを母にぶつたかわからない。染み込んでしまった思ひは、大人になつても、生半に覆せるものではない。現に母が平然と宗旨変えをしたのは、兄がいなくなつたからだ。

そうして越して来た母は、何年も前から準備されてきた部屋に落ち着いた。帰郷の都度、島津は時には媚びるような気持ちで住宅の平面図を広げて間取りやら何やら説明はしていたから、母に戸惑いはなかつた。実物を前にして万事小振りな町場の家を面白がつてさえた。が、それもほんのしばらくのことだった。

母はすぐに退屈した。ここでは、世話を焼かなければならない息子はおらず、店番をしつつ他愛ない喋りに興じる客の訪れもなかつた。

心配することは何も無かつたかわりに必要ともされず、次第に張り合いを失くしていったのではないか。

もう一人の息子は、暮らしの厳しきから連れ出してはくれたが、仕事に出かけるしか能のない人間に映つたのだろう。家を留守にしていることが多くてシンミリ話をする時間さえとれない。何度か母は牙子に愚痴つたそうだが。

あと数年働いて、それから母との三人の生活を楽しもうと、島津は算段していた。まずはスタト下させ、こちらに馴染んでもらう。それから相談しつ……。

ところが、田舎ではあんなにも気丈で、いわば

のこと。

引つ掛かるのは兄の名前には必ず「さん」がつくことくらいで、取り違ひは聞き流していたのだが、遙か昔に亡くなつた父の名や、元の屋敷の隣人などが頻りに登場してくるようになった。母は病んでしまったのだと思わざるを得なかつた。

そうしたある朝、母がいなくなつていた。夜の散歩に二度ばかりつきあつた二人の明け方の眠りは深く、母が家を出たことに気が付かなかつた。血の引く思いで散歩のコースを探し、駅周辺で見かけた人がいなかったか聞き回つたが行方が掴めなかつた。交番にも届け、事故のニュースに神経を失らせ、交互に近辺を歩き回つた。

その日の夕方、兄嫁から電話が入つた。郷里の駅前で母が保護された。家は？ 家族は？ と訊ねる駅員に、住所も誤りなく伝え、「島津久美に連絡してくれ」と言つたのだそう。どうやって辿り着いたものか。無事が確認できて胸は撫で下ろしたものの、釈然としなかつた。

「合点毫碌かよ、参るなあ」

牙子や、駆けつけてくれた奈緒子の手前、ふざけて見せたが、母に翻弄されたという思いを消すことができなかつた。

「誠さんよりも、お義母さんのお付き合ひは私、長いよ。こつちに任せて。五年間、大事な誠さんと暮らせてお義母さん、本望だつたわよ」

高校までの十八年。こつちでの五年。母と顔を合わせていたのは、合計しても人生の三分の一強。久美の方が長く、しかも劇的な経歴を母と共有している。心の通わせ難い実の息子よりも、いわば戦友であつた嫁の方に身を寄せることを望んだと

老いを見せなかつた母が徐々に様子がおかしくなつた。日中の大部分を自室で過ごし、昼食こそ牙子と一緒にだが、夜は部屋に運ばせるようになった。島津の帰宅が遅くて夕餉を囲むことがあまりに少ないことへの、ちよつとした反抗か嫌がらせ、と、初めは軽く考えた。

「まるで子供だね」

「あなたがほとんどいなくて寂しいのよ、お母さん」

「それはないだろ、毎日同じ家で寝起きしてるんだぜ」

そのうち納まるだろう。笑つて好きに任せたのがいけなかつた。一人食事は母の習慣になり、休日にも頑なにそれを守つた。

都心に通う島津は電車の混み避けるため朝が早い。慌しい朝食に付き合わせるのが可哀相で母を起さなかつた。だから、朝も別だ。

同じ家にいるのに顔を合わせない。そんなことが続いて、どうやら母の胸中には不穏な波が立ち始めたように、好ましくない空気が家族を包んだ。ギクシャクするのは避けようがなかつた。

次いで母は、外を歩きたがつた。地理に明るいはずもなく、毎回牙子がつきあつた。丈夫だつたが年配が年配で、そう長い時間はかけなかつた。「そろそろ」と牙子が言えば逆らうことなく踵を返す。外歩きについては聞き分けの良い年寄りだつたから、牙子も油断していた。

「誠を迎えに行こうかね」

ある時、夕食を済ませた母が、悪戯っぽい目をして牙子を誘つたという。最寄り駅まで十分とかからない。住宅地だが通りには商店が並んでいて

いうのか。

ではあの時の、五年前の、あの決断は何だったのだろうか。

直ぐにも駆けつけ連れ戻そうとする鳥津を、久美は止めた。

「相談はゆっくりでいいでしょう。お義母さんにも時間が必要だと思う」

俺は傷つかない安全なところにおいて、人との関わりを深めることが遂にできない人間だということ。鳥津は頭を振った。俺は母に、また棄てられてる。

一方で冴子は、言葉にできないもどかしさから老人が思い切った行動に出たのだとしても、そのことで受けた衝撃は大きかったのだろう。鳥津とは違う意味で落ち込み、それは一通りではなかったということか。夫の母の終の棲家として、全身で尽くした全てが拒否されたも同然だったから。

母が去り、妻が不在の家に一人籠っていると、ひたすら忙しかった反動からか何をする気も起らず、捨て鉢な目をたてている。母親を病院に見舞う都度、立ち寄ってくれる奈緒子に叱られても仕様のない有様だ。

「お父さんで、そんなだった？ ご飯食べてる？」

お風呂は？ なんか臭いよ、そのシャツ」

矢継ぎ早にまくし立てる娘が、有難いような鬱陶しいような。

だが、思い切って外出し、こうして緑を濃くしている木立の中を歩いていると、体の内側に静かに沸き立って来るものがある。

でも自分が優っていたとは言えない。ずっと昔から、兄との比較でしかものを見ていなかったような気がする。殊に、母をめぐっては。

いずれにしろ、ここに並んだどの動物にも敵わないと思う。真つ直ぐに生きたであろうこの者たちには。命の秘密を語ってくれようとしているではないか、鼠も鹿も穴熊も、蝙蝠にしてさえ。

次に進むと、更にいくつかの区画に分けられた大小様々な骨格標本が並び、白い標本の重なりあつた奥に腰を屈めて見入っている少年の姿があつた。

他に入館者のいない床に靴音が聞こえたか、少年がフツと顔を上げ、驚いたように鳥津を見た。驚いているようだ。何故驚く？ さつきまで電車の中でチラチラ俺を見ていたのはそっちじゃないか。

「やあ……」

近づく鳥津に少年は「こんにちは」と礼儀正しく挨拶を返した。不思議がる様子はあがるが、警戒はしていない。

「君は、私を知っているのかな？」

「いいえ」

「それじゃ何故」

「お父さんに似てるなど……」

思わず鳥津は声を上げて笑った。年寄りをからかうのか。

「本当に似てたんです、お父さんの写真に」

「写真？ 今はおられないということ？」

「はい、亡くなりました」

「ああ、なるほど。ここはお父さんと一緒に来たところなんだね」

気を良くしたまま標本館の扉を押した。二重になつたガラスの内扉に手をかけて鳥津は一瞬たじろいだ。

正面のケースに何か生き物の骨が置いてあり、虚ろの眼が入館者を迎えていた。

「ああ、骨格標本……」

あの子は何を見に来たのか。訝しみながら中に入った。エントランスロビーで鳥津を驚かせたのは大きな眼窩を持つウミガメだった。亀の骨格など見たこともない鳥津は、入口の一体から好奇心で捉まってしまった。

何も知らないものだ。亀の甲羅は、前足後ろ足が背骨に連結されているなどは。甲羅そのものが骨格の一部なのか？

手に取ることは無論できないが、ためつすがめつ、見れば見るほど興味をそそられた。

コーナーを回った最初は、緩やかな波線グラフを描いたような骨が壁面に掛けられている。大きな蛇だった。蛇も全身、骨でできている。そんなことにも驚く。背骨と呼んでいいのかどうか、頭骨に続いて尻尾の先端まで一対の肋骨が姿なりに湾曲して背骨から発している。頸の二重になつた関節は大きな餌を呑み込める仕組みだろうし、開く肋骨は頬張つた餌を体の奥へと送り込める。ああ、これが生き物の力の源なのかと嘆息が出た。

次々と目を眩るばかりの動物たち。地中で土を掘るモグラは、頭骨の鼻先が尖り前足の骨は逞しく、そして平べったい。まさにシャベル。

大きくて後ろが下がった推骨に細い骨盤が続く、長い後ろ足を持つているのは瞬発力があつて走るのが速い動物、例えば兎だ。

「いいえ、お母さんと。お母さんが再婚して外国に行く前に」

父親を失くし、母親にも去られたという少年をまじまじと見つめた。生きてはいるけれど、ここにはいない母。今度は鳥津が少年に似通つたものを感じる番だった。

「外国に住んでるの？」

「はい」

「君を連れて行けない事情があつたのかい？ 立ち入ったことを聞くようだけど」

「よくわかりません。でもお祖父さんとお祖母さんだけになってしまふので」

「君に二人を預けたということ？」
少年は照れたように笑顔になった。まさか小学生に老親を預ける娘がいるはずもない。少年の祖父の年齢は、恐らく鳥津に近い。とすれば充分預かつてやれる。鳥津自身の孫娘は小さ過ぎるが、それでも頼まれるようなことがあれば出来ないことではない。まして小学生も高学年に近いとなれば。

そんなことより、母の不在をマイナスに受け取ってはいないらしい子供の心根が腑に落ちない。

傍にいても遠かつた母。刻み込まれてしまった傷の記憶。それが全てではないけれど、取り戻したいのか挽回したいのか、とにかく回復を願う気持ち。……鳥津は、自分と母親との関係をなぞっていた。

「ここには生き物の秘密が隠れているのよ。よく見なさい。お母さんがそう言って連れてきてく

そして、哺乳動物たちの肩甲骨は彼等の行動の活発さを物語る。どれもまるで立派な甲冑を装着しているかのようだ。

頭骨だけが並んでいるところでは、夫々の生存の場が窺える。どんなところに住み、何を食べていたか。山羊の歯は草を引きちぎって搗り潰すように臼歯が発達しているし、肉食の動物は大きくて頑丈な顎を持ち、鋭い牙はもがく獲物を押さえ込んで引き裂く。

手を使って餌が取れる雑食の猿たちは、人間に割合似て犬歯も臼歯も備わっている。さつき見た大蛇の鉤形の歯は、後ろ向きに並んでいた。一旦啞えられれば逃げようがない。

だが、この者たちも歯を損なえば、生死に関わってくるわけだ。噛むこと、齧ること。切り分けのにも使うだろうし、身繕いもし、時には剥き出して意志を伝える役割も果たす。

老いた獣は、歯も体力も失つた獣は、生を繋ぐためにどんな工夫をするのだろうか。

引き込んで想像したせいとか、展示された動物たちの列に、一瞬自分を置いていた。

五年前に兄の骨拾いをした。大柄だったから壺も一番大きいのを準備したが、蓋が浮いた。「立派な体格の方でいらしゃいましたね。お人柄もさぞかし……」

斎場の係員は居並んだ親族の気持ちを擦ってから蓋を押す手に力を入れた。崩れてしまった兄の頭骨はここには並べられない。俺も歯を失くしてしまつたら資格落ちてこどな、と、馬鹿げた連想に小さく笑った。兄は大兵だったが、根性では……いや、根性

れたんだ。僕、感激したよ。猿の尻尾は先つちよまで骨が入っているし、反対に、あんなに力の強い象の鼻には骨がないんだ」

今しがたの鳥津の驚きと、そっくりそのままの感動を少年は熱弁する。

「パンダだって、クマ科なのに肉食じゃない。竹を食べるよね。熊の手でどうして竹を握ることが出来るのか？ おじさんはわかりますか。偽の親指と第七の指を持っているからです。それって骨を見ないとわからないことなんだ」

少年は教える人になって、鳥津の手を引っ張つた。

目当ての場所に行くまで、お喋りは続いた。「北極ではね、ある種の鳥を撃つときはメスを狙うんだって。オスを先に撃つとメスはさつきと逃げちゃうけど、メスが撃たれるとオスはそこから動かないんだって。猟師は一発で二羽子に入れる」

「それもお母さんの話？」

「うん」
一挙にくだけた調子になって言葉を次いだ。「お母さんは言ったんだ。私が動けなくなると、あなたは駄目になる。あなたのためにと思うだけだとお母さんも駄目になる。私は飛びますよ。あなたも精々頑張ることです」

「なんか、少し難しいね」
この理屈が通るものかなと怪しみながら見下ろすと、少年はコクリと予想外の素直さで頷いた。

白鳥だったか、雁だったか、渡り鳥の群れの一羽を撃ち落とすと、隊列を組んで飛んでいた仲間内の数羽が降りてきて、草叢の陰から様子を窺



山口 馨

やまぐち かおる
1942年生まれ
文芸同人誌「渤海」にて小説執筆
「とやま文学」ほか地方誌にて
小説、エッセイ、コラム発表
作品集に『山口 馨 01 - 03』『山
口 馨 04 - 08』
富山市在住



「教えない。でも、お祖父ちゃんも言ってた。お前の母さんは、魔法を使う。どんな扉も開けることのできる合鍵を持つてるからって」
そこにだけ日が射し込んでいるような少年の傍から、島津はゆっくりと離れた。
「おじさん、また来るよね」
「ああ」
「また来ようよ」
扉に向かって歩き出していた島津は、声を背に聞きながら、手を上げて振った。

うという場面をテレビでみたことがある。これまでも、と判断してから仲間の列を追いかけるとナレーターが語った。鳥と言えども、と少し胸が熱かったのを思い出す。
「これ」
指差されたコーナーは海獣が並んでいて、少年はアザラシの前に立った。
「お母さんの手紙に書いてあった。イヌイットの皮袋のことが」
「イヌイット……。北極に住む人たちだね。さっきの鳥も北の話だったね。するとお母さんは……」
「カナダなの。フィリップさんは極地研究をしている人。日本へ来たときお母さんが通訳した」
「つまり、君のお母さんはフィリップさんと出会って好きになっちゃった。それで結婚してカナダに住んでいる」
「そう、英語とフランス語がペラペラなの。あ、当たり前か」
「君と一緒に行かなかったのは」
「フィリップさんにも子供がいて。お母さんはまずは軟着陸する必要がある」
「ほう、なかなかの解説だ」
そう言いながら島津はまた自分に引き込んだ。島津家に後添えで入った母は、先妻の子、勝を常に立て続けた。依怙地にそれを守ったのは、父と一緒にいる際の決め事だったのか、他の事情が働いていたのかはわからない。母は母なりの正義を貫いたということだ。そのお蔭で実の息子は、未だに独り立ちができないでいる。
島津の胸の内に頓着無く少年は話を続けた。

「イヌイットの人たちは夏の狩はセイウチとかアザラシなんだって。肉は食べるけど皮も使う。骨も無駄にしない。特にアザラシは皮で遊び用の袋も作ったんだって、昔は。小さい袋。中に何を入れると思う？」
「さあ、小さいのなら家の中で使うんだね。何をして遊ぶんだろう」
「冬は、氷を積み上げた家の中にあるしかないでしょ。だから皆で物語を作ったんだって。袋の中にはアザラシの後ろの足ヒレの骨が入っているの。足とか手とかは少しづつ形が違う、いくつもの小さな骨が組み合わさってできてるんだ。それをバラバラにして袋に入れてある。それをね、輪にした紐で引っ張り出すの。二十個ほどの骨には一つ一つ名前と役割があって、引っ張り出した何個かで、代わり番にお話を作る」
「名前が書いてあるの？」
「ううん、イヌイットの人たちは形を見ただけでわかるんだ。お父さんとか、舟とか家とか、犬とか」
「例えば？」
「例えばこんな話。太陽が沈まない季節になりました。お日様は何日も横歩きをするだけです。犬ゾリを走らせていたお父さんは、雪の原っぱの向うにカリブーの群れを見つけた。家で待つ家族のご馳走に、どうしても射止めなければなりません。追いかけて追いかけて、とうとう一番大きな一頭を倒したのですが、持って帰ることができませんでした。雪が溶けてゾリが動かなくなったからです。……とか」
「カリブーね。トナカイの仲間だっけ。一所懸命

やっても、どうしようもないことってあるよね。で、他には？」
「お父さんたちは狩に行くとき、何頭もの犬をソリに繋ぎます。でも、ソリを引く犬たちに優しくはしません。特に弱虫の犬には一番厳しくします。弱虫だから鞭が飛んでくるとキャンキャン鳴きまです。でも、その犬は悲鳴を上げるのが役目なのです。何故なら他の犬たちは、その弱虫犬のように打たれたくないから頑張ってソリを引っ張るからです」
「そう、役目がねえ。泣きながら引っ張る役目がねえ」
自慢げに少年は息を継いだ。
「アザラシの足ヒレの骨ってどうなっているのかわかって思うでしょ。真似して作ってみようかなって。袋から偶然出てきた人や動物や物が、どんな風に動いたり考えたりするのか。想像すると楽しい。それに、同じ種類が出てきたって人によって物語が違うでしょう。それも面白いよね」
少年の話し振りにすっかり引き込まれて、島津は唸った。
物語を限りなく詰め込んだ小さな皮の袋……。実物は知らないが、島津にも想像できるような気がした。
「君のお母さんは手紙を頻繁に送ってくれているんだね。変わった珍しい話もどんどん届くんだけ」
「うん。面白いことが一杯書いてある。僕、思うんだけど、お母さんは飛んでったけど傍にもいる。前よりもっと強烈に傍にいる。だからこっさりあだ名をつけているの」
「何て？」

有馬隆博 著 新刊!

『あるべき未来と若者のために』

アジア文化社 6月刊 定価 1050円

21世紀に入って8年、世相は混迷の度をいよいよ濃くしている。世間通の著者がその病理を鋭く分析し、希望の灯の可能性を心の世界にさぐる。

同じ著者による人生智の書 『六〇歳のテーマ』 好評発売中!

渤海

富山県

「書く」「寄る」「出す」

創刊号は一九七四年（昭四九）十二月である。それまで続いていた「文学DARA」を発展解消しての「渤海」発足であった。DARAと言うのは富山弁の「あほんダラ」のダラである。一九七三年（昭四八）八月の「文学DARA」終刊号は十四号であった。十三号は同じ年の五月発行で計画的な解消だった。

したがって次の準備は早かった。翌年一九七四年の三月には「渤海」の設立総会が持たれた。集まった同人は三十名、富山県と石川県がほぼ半々で、関東、関西からの参加もあった。

すでに準備されていた誌名の「渤海」は中国の渤海王国に由来する。九世紀ごろ、渤海国の使節は主に北陸地方の海岸から日本に上陸している。それはこの地が大陸文化の玄関口であったことを意味する。その文化が京の都を初め、全国へ発信されて行った。「渤海」という誌名はその「全国発信」に因んでいる。

創刊号は石川近代文学館気付で発行された。当時の館長の後押しがあつて、暫らくは当館気付で発行させて貰った。しかしある時、新聞のコラムで「自由であるべき民間の同人誌が公の施設を気付にすると何事か」と皮肉を言われた。そのころには、石川の同人が大分少なくなっていた。また、気付で届く郵便物が文学館の職員に随分手間を掛けていることも軽視できなくなってきた。そ

こで遅ればせながら、一九九七年（平九）三月発行の三十三号から発行元を富山に移した。

規約では「日本海文化の歴史に根ざした芸術を創造する」と高い理想を掲げているが、なかなか難しいところである。号を重ねるごとに規約の趣旨に近付いていると思いたい、それは読者の判断に委ねなければならぬ。

当初は季刊「渤海」を銘打ち、年四回の発行を目指した。「季刊」は今も規約に残っているが、春季、秋季の年二回の発行が定着したのは一九九五年（平七）三月の二十九号からである。その頃「書く」「寄る」「出す」の同人誌活動の基本を再確認した。節目となる年間計画も決めた。

まず、「書く」については年二回の締め切りがある。秋季号の締め切りは五月の連休明け、春季号の締め切りは十一月初めの連休明けである。当初は締め切り間近になると言い訳の電話や手紙ばかりが編集者に寄せられたが、最近は概ね期日が守られるようになった。締め切り日から二ヶ月近くの編集・調整の期間を持って、秋季号の原稿は六月末、春季号の原稿は十二月の末に印刷所へ回す。二度の校正を経て、春季号は三月十日、秋季号は九月十日付で発行する。実際にはその前月中に納本されており、四、五人が事務局で発送配本の作業をする。この周期で一年が動くようになって今年で七年になる。いろんな機会に、そろそろ春夏秋冬の四季発行に踏み切らないか、と編集者

から提案するが未だ同人の賛同は得られていない。

「寄る」とは、同人が集まって顔を合わせることである。そうでなければ同人誌の看板を揚げられない。「渤海」では年四回は確実に顔を合わせることにしている。一月の新年会から始まって、四月の春季号合評会、七月の県外研修、そして十月の秋季号合評会である。

合評会には同人の知人や他の同人誌の方の参加も得ている。合評会が終わると懇親会があり、合評会で聞けなかった感想や各人の次作への想いについて忌憚のない遣り取りをする。

県外研修は近頃の文学探訪といった趣きで続いている。石川、福井、新潟はもとより岐阜、長野、山梨方面へも足を伸ばした。各県ゆかりの作家や歌人の文学館を訪ね、美術館、博物館もコースに入れて見聞を広めている。その土地の酒肴を賞味し、今では同人の楽しい年中行事の一つになっている。

新年会を含め何かに付けて親睦を深めているように見えるが、この年四回は程よい節目になっている。

県外ではないが「渤海」の二十号を記念して、一九八九年に「渤海」、渤海国へ行く、という中国研修旅行を企画した。天安門事件で一年延期し、翌一九九〇年（平二）八月には十人の団体を編成して楽しい中国の思い出を作った。



2000年（平12）1月
「渤海」新年会（富山市内）



1990年（平2）8月「渤海」、渤海国へ行く
中国旅行中、遼寧省丹東市・鴨緑江河畔にて



2007年（平19）8月「渤海」県外研修
長野県湯田中温泉郷・「志賀山文庫」にて



2006年（平18）8月「渤海」県外研修
福井県東尋坊・「文学の散歩道」にて

さて、最後の「出す」については勿論お金、雑誌運営経費に充てる会費である。会費には二種類がある。一つは通常の会費でこちらは月二千元で年二万四千元になる。もう一つの会費は「原稿料」である。同人誌では常識になっているが、書いた枚数に応じて印刷の経費を負担して貰う。「渤海」では原稿用紙一枚八百円である。三十枚で二万四千元、五十枚で四万円ということになる。この会費と原稿料を合算し、年二回に分けて雑誌が発行される頃に会計に入れて貰っている。感謝しなければならぬのは、原稿を出さないと通常の会費だけを納入し続けている同人もおられるということである。「渤海」を支援するために参加されているのである。

こうして同人誌活動を続けている。長い年月とともに各人各様の作風に磨きがかかり、それぞれの作品独自の味が出てきた。「図書新聞」「週間読書人」、そして「文学界」の同人誌評で、発行する度に「渤海」同人の名前を見かけるようになった。この三月の春季号で設立三十四年、五十五号を数える。

（杉田欣次／文芸同人誌「渤海」編集委員）

渤海

〒930-0916

富山市向新庄町二・四・五 杉田欣次方

☎076-451-7770

同人雑誌優秀作

魚の時間

中山茅集子



中山茅集子

なかやま ちずこ

1926年 北海道札幌市に生まれる
 1944年 広島県立府中高女卒
 1976年 「蛇の卵」にて中央公論第19回女流新人賞受賞
 1977年より1997年まで「井上光晴文学伝習所」に学ぶ
 1988年 同人誌「ふくやま文学」創刊
 2008年 同誌20号刊行

某日

プールの中を歩き始めた時から女は魚になる。乳房が隠れる位置で右から左へと流れる水の中をほとんど蹴りだすようにして歩く。体全体は浮力で軽くなっているのに、前に進むときの水の壁は堅固なクリスタルの重みだ。透明なクリスタルの壁を押し破るには力いっぱい蹴るしかない。女は足を蹴りだすと同時に両手を鰭にして大きく水を掻く。前に進む。次の足を蹴りだす、鰭で水を掻く。コースの真ん中が難所だ。深さも流れも女が耐えられればプールの向こう端にたどり着けないし、第一後ろに続くとりどりの魚たちの妨害になる。女は知らぬまに口を開け呼吸を荒くしていた。タイルの底に二、三度足を滑らせてつんのめり、どうにか折り返し地点が近くなると、とたんにからだは水に抱きかかえられる。水深が浅く流れも緩やかになったせいなのだ。ストレッチ用のパイプに掴まり足をパチャパチャ

ヤやっていると、絡みつく水の感触が女の中に眠っている太古の秘密にそっとそっと触れようとした。本当は女だつて知るはずもない、遠い昔に起こった人の始まりを、魚から人は命を授けられたという話が信じられる。気の遠くなるような太古の秘密も、水に包まれている間は五体が無理なく溶け出し、浮遊して、魚に帰る。

「大丈夫ですか」

アシスタントの若い女に声をかけられ、魚の夢は途切れた。バーに掴まりいつまでもパチャパチャやっている女を訝しく思ったのだろう。

「あ、大丈夫よ」

女をかかなりの年配と察して声を掛けたらしい。プール際にしゃがんで覗き込むアシスタントを見上げて、あつと声が出そうになった。パンダそっくりの目。目の周りを黒く隈取り黒い付けまつげの化粧はグラビヤから飛び出してきたばかりらしい。口だけで笑う。

「ゆっくりでいいですよ。無理をしないでゆっく

り歩くようにして」

女はパンダの側から離れる。わざと大腿に歩いてみせる。老女と見られたのが気に障ったのだ。胴体を水着で隠しても、はみ出た顔や手足は紛れもなく老女だ。そんなことは承知なのに。女自身が誰よりも一番よく分かっているというのに。大きなお世話だ。

街を歩きながら、連なるショーウィンドーに映る姿から逃げだしてプールにやってくるのは、人ではない魚になるため。永遠に年をとらないという伝説の人魚になるため。

某日

水の中に桜貝がひらひら。はつと目を見張るとようこちゃんの足指の爪だった。ようこちゃん

は一人で立つ事ができないので浮き輪に寝かせられ、頭と足の部分に二人のアシスタントがついて移動させている。きやっきやつとはしゃぐ澄んだ声が室内プールの高いドームに響き、水の上に跳ね返ってくる。浮き輪の上では身体半分水に隠れているのでピンクの水着と赤いキャップが幼い少女にしか見えないが、いつか脱衣所で車椅子にかけている裸のようこちゃんを眼にして呼吸を止めた。

近頃、女は自分の中に異性が棲み始めたのではないかと疑う。かつて鏡に映る体はまきれもなく女であったのに、ある日、唐突のように老いと向き合った。目に映るかぎりの箇所を衰えを自覚し嫌悪しながらも、我が身のこととして受け入れたときから異性が入り込んだ。

プールから上がった少女は介護人に身じまいをしてもらうのを待っていた。その人は脱衣所の車椅子にようこちゃんを一人待たせてシャワーを浴びているのだろう。隣り合うシャワー室から激しく床を打つ水の音が聞こえていた。

ロッカーを背に茫然と突っ立っている女を見て少女は限りなく無防備のまま、人懐っこく笑いながら、目の前の老女が突然狼に変身して襲い掛かるとも知らずに「おばあちゃん」と手をふる。

女の目は完全に異性の目になる。車椅子の、あけないほどにも見える笑顔から下の白いからだは、成熟した女そのもの。柔らかに盛り上がった乳房からゆつたりと下ろした下腹へ。天使ならぬ彩られた濃い草むらがる狼の本能をそそる。なんという不条理だ。女はうめいた。

「待たせたね、ごめんごめん」

バスタオルを巻きつけた母親らしいのが走りこんできた。天使の無邪気と肉欲の秘密を併せ持つ車椅子の少女は忽ち母親の陰になり、女は閉ざされた欲望を握りつぶすとすこすこと退散した。

ようこちゃん、アシスタントの呼びかけから最近覚えた名前だったが、いま彼女は幼子の歓声を上げながら足をばたつかせ、飛沫と共に桜貝を散らしていた。十本の足の爪に塗られたピンクのENAMEL。

ふいに、女の足元から湧き上がるものがあつた。こちらにもなにやら貝殻。灰色にささくれた爪……。ようこちゃんの桜貝とは似ても似つかぬ老人の爪。どこかの施設で起きた事件、収容されている老人への虐待、懲らしめのために？ 介護人の捻じ曲がった快楽のために？

怖気だった脳裏に浮かぶ世界の片隅で絶えず起こっている似たような事件。独裁者の国の拷問台の床に散らばっていたという無数の貝殻が、女のゆく手を阻むクリスタルの壁に埋め込まれる。愚かな為政者の紋章のように。

襲い掛かる妄想から抜け出そうと女は遮二無二足で蹴散らしたり大きく腕を振り回したりして進みながら、灰色の死に貝にまじる桜貝を掬おうと躍起になる。隣り合うレーンを今しも二人のアシスタントに支えられながら上機嫌ですれ違うようこちゃんから桜貝がこぼれ、歓喜の声が上がる度、あまりの開けっぴろげの声に女は殆どあの刹那の声を重ねてしまった。

某日

六十年を遡ったこの日、女は一人の少年と生死を分け、女が生き残り少年は死んだ。

その夏のその時刻、一九四五年八月十五日正午過ぎ、十七歳の少女と十五歳の少年は工場の管制塔に登り、小鳥の巣箱に似た小屋に向き合った。二人を隔っているのはたつた今よじ登ってきた梯子が垂直に落ちる穴、地獄の穴を挟んで少年は立膝の間に頭を埋め、少女は少年を睨み続けた。負け戦の玉音放送を聴いてから十分とは経っていないだろう。

日頃何かにつけて動作ののろい少女にしては破天荒の即断だった。ラジオから流れる玉音はひどい雑音まじりだったが、戦争が終わったんだ、負けたんだ、ということが分かったとたん、同義語のように死ぬ時が来たんだ、が少女の中で一列に並んだ。刹那にひらめいた死は殺される死であり、間をおいて自死になり、次に浮かんだのは心中、一人で死ぬより誰かと抱き合つて死にたい、だれにしよう？ そう、あの子がいい、絶えず腹を空かし、油と汗にまみれながら飛べもしない飛行機の部品を削っている軍国少年はヒットラーが好きだったのだ。

ドイツが負けて偉大なる殺人鬼が愛人と自爆した日、旋盤の轟音を上回るほど少年は号泣した。日本が負けた今こそヒットラーの後を追うべきだよ。少女は素敵な思いつきに夢中になった。ヒットラーを抜きにしてもかわいい少年だったし。

玉音放送が終わったあとも阿呆のように立ち尽くしている工員たちから素早く抜け出し、旋盤工場に引き返す少年に追いつくと「管制塔でまってるから」と耳打ちし、工場の東端に建つ管制塔に登りはじめた。見上げる度に首が痛くなるほど高い塔に登るの

は初めて、空襲に見放された管制塔はすつからからんと夏空に突き刺さり、梯子を踏む裸足に湯玉になった汗が噴出し全身に呼吸して、それが今度は冷や汗となり、鳥肌に代わった頃ようやく巣箱に辿りついた。

「どうしたの、私もあんたもどうせ殺されるんだよ」

しゃがみこんでいる体をほんのちよつとずらして抱き合えば、地獄の穴が待ち受けるまたとないチャンス。

遙か下界でざわめく人の気配が立ち上つてきた。工場を取り巻く町屋から、広場に呆けていた工員たちからの、恐ろしい叫びが呻きになり、罵り、絶望になり、死にゆく二人を取り巻きがんじがらめにしてゆく。

「はよう決めなさいよ、たった今ここで私と死ぬるか、アメリカ兵に殺されるか」

管制塔からは筒抜けの空だ。八月のざらざらした青い空はどこまでも遮るもの無い海原。真夏の海。地獄の穴へと吸い込まれる代わりに、とんぼ返りで海へダイビングができそう。

少年は顔を上げ、老人のように思慮深い額に皺を刻む。「おれ、兄ちゃんに黙ってきとるんや」

そうだった。十五歳の少年は大阪の親元から二つ違いの兄と疎開して工場の寮に暮らしていたのだった。

「今更なによ、死ぬるのにいちいち兄さんと相談せんならんやなんて、意気地なし！」

せつかく一緒に死んでやろうと思つたのに、と少女は一瞬空を見上げ、トンボ返りの代わりに地獄の梯子を伝い下りた。少年を見捨てて。

一九四五年八月十五日の空に架かった鳥の巣箱から、一人は逃げ出し、一人が死を選んだ。

同じ日の夕刻、管制塔の真下で死んでいたのは少年。弟の兄が見つけた。逃げ出し生き残った少女は町の外れを流れる川へと走った。真夏だとい

うの川の水は冷たく澄んで、しかも速い流れだった。川面が暗くなるまで水に浸かっていた。水に晒され肉が削がれて骨が見えるのを待った。産卵を終えた魚がそうやって死んでいるのを見たことがあり、自分もそうなることを願い、泣きながら「意気地なし！」と叫んだ。その一言が少年を死に追いやり自分が生き残った。意気地なしは少女だった。泣き叫びながら骨になるのを待った。魚の骨に。

某日 プールサイドにベンチが置かれ、一人の男がその上で片腕を支えに片足を水平に上げたまま静止している。やがて腕が小刻みに震え、水平を保つ足が下がり始めるが懸命にこらえる。男はすでに老人の仲間入りのはずだが、老いに逆らつて鍛え上げた筋肉が若者に変わらぬ見事さで、女は見られた。何時ものあの入だ。

プールは三つのレーンに分かれていて、一つが泳ぐ人にあと二つはウォーキング専用を決められていた。ベンチで若さを誇示している老人は泳ぎも達者で、惚れ惚れするフォームでクロールを泳ぐ。

もともと障害者のためのプールを或る時期から一般にも開放しているが、時間帯は午前と午後の交互に分けられ、軽度の障害者は一般に組み込まれた。スイミングスクールとはつきり違うところ

正午にちかく鋭い真夏の日が高窓から容赦なく差し込みプールの水に反射する、女は眩しさの余り目を細め、水底のタイルに光が乱反射し万華鏡になる中を、変身したサクダさんが女の足に優しく魚体をこすりつけるのを感じる。それは驚くほど滑らかだった。

一月ほど経つてからプールに戻ってきたサクダさんは、気のせいしか瘦せて生気を失つて見える体でおとなしくベンチに座り仲間の誰彼に受け答えしていた。よく響く声なのでプールを歩く女にも聞こえてくる。

「なあに、大したことはなかったんじや、脳の細い血管が一本切れただけで、この通り手も足も動く」

サクダさんは両手を上げてぐるぐる回し、立ち上がって足踏みした。

「誰でも最初は軽うてすむがの、次が危ないんじや、もう今までのようなわけにはいかんで、わし

がそうじや」

立っている堂々と見えた相手の男は、サクダさんよりよほど若そうだったが、歩き出したとたんに腰がくだけ片足引き摺って離れていく。プールへ下りるスロープの手摺りに体を預けながらゆ

っくりと水に入ってしまった。

その後姿を目で追っていたサクダさんが、意を決したようにベンチから腰を引き剥がすが見えた。

次に女は隣り合うレーンの向かいからクロールで泳いでくるサクダさんに気付いた。水から顔を上げるとき口が大きくあけられ呼吸が荒くなっているのがわかった。水底に光と戯れる魚から蘇生

は、一握りの泳ぎ組をのぞいて殆どが歩き組であることだ。

ベンチの上で、老人は今では全身の筋肉をふるわせ、見かねて近づいてくるアシスタントを待たずに突如腹ばいになった。

「あんまり無理をせんほうがいいですよ、サクダさん」

「あと一分で記録更新できたんだがなあ」

サクダさんと呼ばれた彼は、手首に巻いたタイムウォッチを悔しそうに睨んだ。

「オリンピックにでも出るつもりかいね」

サクダさんがへたつているベンチの近くを通りがかったセイウチのような二、三人連れの女が冷やかす。首から上をこつてり厚化粧した彼女たちの水着がプールに時ならぬ華やきをもたらした。鮮やかな地色にかサブランカや牡丹、向日葵を染め出した水着姿は、流行のメタボリック何とかの危険信号を盛んに点滅している。

「君らみたいな救命袋とは違うわい」

サクダさんの憎まれ口に笑い声上がる。セイウチも白い喉を震わせて笑い、ベンチにへたりこんだ老人を尻目に飛沫を上げながら水の中に入ってきた。

「いい気なもんやが、あの爺さん」

「うちらかて婆さんじゃけどね」

「ほんでも、うちらはあげん莫迦なまねはせん、年寄りの冷や水いんよなね、ああいうのを」

サクダさん、サクダさん！アシスタントの魂消した声が彼女たちの饒舌を断ち切り、ドームに響いた。わき目も振らずに歩き、立ちふさがるクリスタルを押し戻し、蹴破りしていた女の耳にも

した老人は、以前の自信に代わるためらいがあった。女とすれ違う一瞬、ためらいが羞恥になる。女はとつさに目を逸らしたが、素早く捉え返して「よかったですね」と言わずにおれなかった。

若者のような逞しさと筋力を誇る老人は遠くから眺めるだけの彫像でしかなかったが、今日のサクダさんにやさしく揺れる鱗を見たとに思った。

某日 あのサクダさんが亡くなった。その日プールに出かけた女は受付の窓口で知らされ、たったこの間会ったばかりなのにと凡その目をめぐり返し、あの日クロールで泳いでくるサクダさんがすれ違ざまに見せたはにかみを思い出した。いつもの

颯爽とした泳ぎではなかったが乱れてはおらず、美しいフォームを完全に保ちながら、ほんの少し、受け止める女の感性だけに触れるブレのよう

な。

「お元氣な人だったのに。あんなことがなければ、とてもお年寄りには見えなかったけど、」

「あれで八十歳を疾うに超えとられたんですよ、なにしろ海軍さんだったからなあ」

アシスタントの男が溜息混じりに言う。

「海軍さんって、あの海軍さん？」

「もちろん、あの海軍さんです。なんでも偉い人だったみたいで。やっぱり海で鍛えられた人は違うなあ」

「泳ぎでも違いましたよね、海の男と言うか」「ですわね」

若いアシスタントのいまふうな返事に女は首をすくめる。サクダさんの死が軽くあしらわれたほどに気落ちした。戦争を生きのびた男がまた一人

消えた、と女は胸の内ですぼやいた。
サクダさんのいないプールは大きな魚を失ったように精彩を欠いている。海軍にいた人なら見事な泳ぎもなすけられる。あの日サクダさんを「年寄りの冷水」と嘲ったセイウチの群れも、今日はさすがに神妙な顔で歩いていた。

某日

水の中に入ると女はまず軽いストレッチを試みる。かなり強い水流が全身を取り巻き、底のタイルを踏みしめていないと不安定に揺らぐ。大きな魚を失ったプールをすぐには歩く気がしなくて、バーに掴まりゆらゆらと足を泳がせるうち、絡まるぬるい流れの感触が思いがけない記憶につながる、海の男の死をも手繰りこんであの夏の日に運ばれていく。

負け戦が内にも外にも呆れるほどの無残な死を記録して敗れた夏、軍需工場から解放された女の周りに良くも悪くも命を保った若者たちが群れていた。命を保ったことでは女も同じ。戦いのさなか、膨れ上がる数の死の中には生きていることと死ぬ事はびつたりと重なり、少年少女は青春を飛び越え老いをも飛び越え、破れかぶれに達観した果てに迎えた負け戦。
女の住む町外れに大沼と呼ばれる沼があった。

負け戦の余燼と気違い染みた陽気が若者たちをデカダンスに押し流すなかでの夕暮れどき、特攻崩れの群れに混じって女は沼に行った。小高い山の中腹に、かつては村人が造った溜め池だが、今では水際を厚く葎が取り囲み、青黒く満ちて不気味でさえあった。播り鉢状の深い沼は女子供にと

しばる齒から奇声が洩れた。

「おい！ どうした、ヒコ」

呆気にとられた若者の一人がボンゴに向かったと同時に水しぶきが上がった。

「ヒコのやつ、殺る気だぞ」

誰かが歓喜に喉を引きつらせて叫び、女を置き去りにすると一斉に飛び込んだ。

対岸から沼の中央まで泳いできた男の動きが止まった。堤に座った女から表情までは分からない。が、異変の起きる気配が強かな瘴気となって頬を打ち、蹲っていた場所から立ち上がるも無意識の手が着ていたワンピースをむしりとり……気がつくとも重い水に抱かれていた。

西の山並みに焦げ臭い太陽が沈みかけ、沼を取り巻く樹木の隙間から鋭い光が湖面に朱色の波を立てていた。

「なんだ、君か」

行く手に立ちふさがった影をユキヒコと見て、男は拍子抜けした声で言った。そのあとすぐに、明らかに声の調子を変えた。

「なんだね、どうかしたのか、君はたしか」

男が言葉を使い、同時にユキヒコが無言で飛び掛った。

二人はごく親しい、殊に男にとっては手の内に乗るほどの他愛ない相手だったろう。父をコキユに貶め母を掠めとられて復讐に燃える息子とはチラとも思わなかったに違いはない。特攻帰りの若者はどれも同じ顔を持ったはぐれ者、死にはぐれ生きはぐれて真昼の闇に迷う亡者の一人ぐらいにしか。

「なにをする！」

つて禁断の場だったから、女も沼を見るのは初めてだったし、荒ぶれた若者に混じる女を迎えて沼もまた敵意を露わにした。

若者たちの後について水際を左手に回りこみ、対岸に小さく戯れる水着の男女の中にあの男を見た瞬間、沼が孕む敵意は殺意に変わり女を挑発した。

若者たちはすぐさまクロネコ（簡易な水泳パンツ）を着けると沼に飛び込んでいく。てんでの方角にクロールで散り、途中から一列になって競い始めた。女は初めから沼に入る気はなかった。悪名高い備後の夕風の時刻を持って余し、大沼の妖気に誘われただけのことだから水着の支度もない。沼の向こう岸へと小さくなっていく若者たちをぼんやり眺めるうち、対岸の派手な水着の群れから一人の男が抜け出し、沼の中央へと泳ぎだして行くのを見た。

「きみ、ミケランジェロという僕たちの神様はね、沢山の女を知ること偉大な芸術家になったんだ」

だから僕も、というわけだったろう。僕たちの神様を倣って……だから許されるんだ、男に抱かれて神様の受け売り聞いた。ミケランジェロの卵は空襲下の東京から女の住む田舎町に疎開していたのだ。

「痩せて見えるのに皮下脂肪は充分だ」

膝に乗せた女の腰を撫で回しながら満足そうに言う。

「モデルになってくれるだろうね」

秋の美術展には必ず等身大の木彫裸婦を出品する彼にとってモデルは必須だし、田舎町にいてプ

驚愕とも怒気ともつかぬ、そのどちらをも束ね

て男は叫び、忽ち攻勢に出た。体つきからすれば

男が遥かに勝っていた。樫や楠木を相手にノミを振るう日々で鍛えた腕っ節は、医学の勉強半ばで

兵士になり死にはぐれた若者など一ひねりで潰す自信が見てとれた。

「なにを血迷った、死にぞこないめが！」

絶対の確信に満ちた男が水を蹴って飛び上がり

一気に相手を押さえ込もうとしたときだ。

「死にぞこないのヒコ！ 殺っちまええ！」

男の背後に回った若者の一人がけしかけ、おう！ と他の若者が呼応した。その時まで、男はユキヒコ以外の若者を視野に入れてなかったのだ。慌てて前後左右に頭を巡らすと素早く体勢を立て直し、再度押さえ込みにかかろうとした。

一瞬の差でユキヒコの手が男の首を捉えた。ボンゴを打ち続けた十本の指が凶器となって締めあげる。父をコキユに貶め母を掠め取った男が大声を発したとき、取り囲む若者たちは恐怖の叫びと聞いた。

「女が、女が溺れているぞ！」

苦しさに暴れる男が辛うじて指差す先に、女は本当に溺れかけていた。

この時まで女は、牙をむき出し獲物を取り巻いている若者たちから離れて男と向き合う位置にいた。目が合った瞬間、男は自分を目指したのだと閃いた。大沼に来た時からすぐに男を見つけたように男もまた女を見つけたのだ。神秘的な沼の真ん中で女と抱き合う事をもくろんで。が、女はとつさに叫んでいた。

「殺して！ その男を殺せ！」

口のモデルを求めるのは無理な話だった。「君をモデルに素晴らしい裸婦を創りたいんだ」

値踏みされるような男の掌が腰から下に滑り降りたとき、同じ科白を他の女にも言っていると察した。まだ大人になりきらないとはいえ、雌の嗅覚が不信の匂いを嗅ぎつけ、町の噂に重なった。

「おい！ あいつがこっちにくるぞ」

戻ってきた若者から声があがり、中にユキヒコがいた。医者の子の彼は特典の招集延期を蹴り、医大から特攻隊に志願して生き残った。

「おまえの親父をコキユにした奴だろう」
「ばかな、あいつはただお袋の肖像を創っただけだ」

「私にヴィーナスの肖像を創らせてくれと言うのがあいつの手らしいぞ。芸術の神は美しいものを見た瞬間に降りてくる、とか何とか言っよう、それで大抵の女はコロリさ、ま、おまえんとは金もあるしな」

本気とも冗談ともつかぬ話を無視するらしいユキヒコに若者たちの興味は不発に終わった。戦場から空つぽの命一つ引っさげて帰郷した彼らに戻すべき学舎は閉鎖されたまま、宙吊りであることへの鬱憤が吐け口を求めて苛立つ。

突然ボンゴが弾けた。女と若者たちのいる場所から少し離れて少年のひとかたまりがいた。ボンゴを中にストームしていたが、たった今その輪に飛び込み激しく打ち鳴らしているのがユキヒコだった。端正と投げやりが歪に混じりあった顔が沼の瘴気に憑かれたように燃え、ボンゴに覆いかぶさるかと思えば仰け反りながら打ち続ける。食い

叫びながら、自分の声にふるいたった。ユキ

ヒコの狂気にそそられたとしても、身も心も真っ

二つに裂けるほどの興奮がどこから襲ってくるのか。何もかもが、自分を含めての死にぞこないの

反乱が、このときを待って湖面を沸騰させた。あんな男は殺されるがいい、男はこの先も次々と女を口説くだろう、芸術の生贄として。殺されれば

いい、殺せ殺せとふるいたちながら、同時に女も

また恐怖の叫びを上げた。水に揺れる葎に体ごと

巻きつかれ水底へと引き摺りこまれたのだ。

某日

女は週に三度プールに通う。日毎に動作が鈍くなる中で、湛えられた水に浸かる時間は、人であるときの屈託が溶け出し魚にしてくれる。

盆の入り、女のもとに成功した芸術家の訃報が届いた。負け戦の果ての大沼で人魚となって戯れていた季節。ドンファンは男はすんでのところを死を逃れ、望みどおり芸術家の頂点に立ち、加害者となるべき若者は父親の後を継いで善良な医者になった。

考えようでは、女が溺れるというハッピーングの手柄だったかもしれない。もしもあるとき男の目が溺れる女を捉えなければ……。

人魚の季節からまもなく女は平凡な結婚をし、芸術家の男は性懲りもなくヴィーナスたちからエロスを掠め取ったあげくに野望を実現すべく大都会へ帰っていった。

野望を遂げた男の訃報を手にして思ったのは、あるとき私はまだ彼を愛していたのだっただろうか。憎しみにふるい立ち、狂気のように「殺せ殺せ」と叫んだ裏にひとかけらの愛恋もなかったろ

「殺して！ その男を殺せ！」

うか。

老いてからの女は、しばしば、殺したいほどの憎しみと抱き合う愛の沸騰を遠い景色のように思ひ浮かべた。そして、巻き戻しのきかない多感な季節に灯りが点るのは、かつての仲間が一人また一人と更に遠くへ旅立つ時である。

「商社マンの半生を大過なく終えた夫も充分長生きして死んだ。娘時代の奔放を危ぶんだ女の両親が選んだ夫は、ひと回りも年上の賭け事の嫌いな男だったから、両親は自分たちの目の確かさを自慢した。賭け事が嫌いなことではその通りだったが、周りの女たちを摘まみ食いする癖は治らなかった。表沙汰にならなかったのは、女が知らんぷりを通したからだ。夫が自惚れるほどには女たちにもてなないと察していたから。その上で時に応じて急所をいたぶり、連夜の奉仕をさせるのだった。」

サクダさんのいないプールで水を蹴りながら歩く、歩きながら、自分が未だに生者の側にいることに羞恥を覚える。何かの手違いではないかと。

某日

「おいおい、僕を忘れてへんか」
今の京訛りはセミツベだ。

「ごめんね、忘れたんじゃないの、忘れたかっただけ」

「同じことや、あの日の一番手柄は僕なんやからな」

「わかってる、わかってる」

女は辺りをはばかり声をひそめる。

セミツベは唐木俊夫のあだ名だ。彼もまた名誉ある死にぞこないの一人だった。在学中に海兵隊

に入り、敗戦で姉の嫁ぎ先であるこの町にやってきた。京生まれの京育ちの彼がなぜ京の実家でなく備後の田舎町に、しかも姉の夫は全盲の鍼灸師だった。子沢山の姉の家で居候の身は絶えず空腹を抱えていた。あの季節、空腹は慢性の疫病のように国中を蔓延し、今更飢餓のわけを訊ねる者がいないように、セミツベの事情を糾すものもいなかった。返ってくる絶望の深さを懼れたからだ。かつた。

あの夏、大沼への山道にすだくセミの合唱に誘われてひよいと口から出たものらしい。
「セミが殻を脱ぐんを辛抱して待つんや、ほんでな、脱皮したての柔らかいのんを食うと、これがうまいんや」

どういうわけか女の中で、彼が脱皮するセミを待ち受けて食うさまと、赤ん坊をわしづかみにして頭から食う西洋の大男が重なった。父の本棚から見つけた画集の中で見たのだ。父は少女だった女が勝手に本棚を探すのを嫌っていたから誰にも話したことはないが、「わが子を喰うサトルヌス」は怖ろしい絵である。だから、若者たちがおどけて彼をセミツベと呼ぶとき、いつでも嫌な気がした。

「あの日の一番手柄は僕なんやで」
京訛りが抜けないセミツベが自慢げに言う手柄は、溺れる女を救ったことなのだ。抱えられていた間に、いや、それからも長い間、水着を着けていないことへの羞恥にさいなまれた。
「いい加減に忘れなさいよ、セミツベ、そういう君はまだ元気なの」

「びんぴんしとる、もつとも周りはえらく淋しゅうなりよつたが、死にぞこないが生き残るんも手柄のうちやろ」

笑いに伴う素早い魚影が走り去る。
「コンニチワ！」

突然声が掛かった。高く澄んだ童女を思わせる声。

「ようこちゃんだ。ピンクの水着に赤いキャップの少女は今も楢円の浮き輪に寝かされ、前後をアシスタントにかしずかれてご機嫌だった。アシスタント嬢の健やかで魅力的な笑顔にも増して今日のようにこちゃんには女王様だ。浮き輪の輿からプールのみんなにご挨拶を送り続ける。」

「コンニチワ！
コンニチワ！」

プールが活気づき、コンニチワが錯綜すると女を取り巻いていた懐かしい男たちが背びれを逆立て右往左往する。ドームの高窓から水底を指して光の矢が射こまれ、ようこちゃんの歌うような挨拶は光と共に水底を打ち、男たちが絵描く波紋とつぶやきにハーモニーする。

水の中を女は歩く。負け戦の猥雑を生きた男たちが今では透明な魚となって訴える。

「俺たちの季節は終わったのか」
「まさか！ 終わってなんかいるもんですか、こうして水の中で魚になるとき、いつでも季節はめぐってくるわ。未来永劫に」

とたんに、歓喜の気配が水中に満ち、絶え間なく呼び交わされるコンニチワと響きあってドームを覆い、無数の木霊となつてプールに降り注ぐのだった。

ふくやま文学

広島県

草の命をさらに強く

今年三月、「ふくやま文学」は20号を発行しました。平成元年に創刊号を出してから年一冊の刊行を守り続けて二十年、小説、詩、児童文学、エッセイの四部門からなる同人誌です。現在、正会員、投稿および読書会員をふくめて四十人ほどの集まりです。

創刊のきっかけは、それまで月刊百号以上続いていた同人誌「文芸プラザ」が代表者の病没により廃刊、熱心な文学志向者の発表舞台が失われたことにあります。

福山市は広島県東部に位置するかつての城下町ですが、現在は大手の鉄鋼会社を有する人口五十万の中核都市です。井伏鱒二、木下夕爾、福原麟太郎、山代巴、近くは日野啓三など、風格ある文学者の故郷でありながら、草の根的な同人誌は至って寂しい状況で、「文芸プラザ」を失ったあとは瀕死に陥りました。

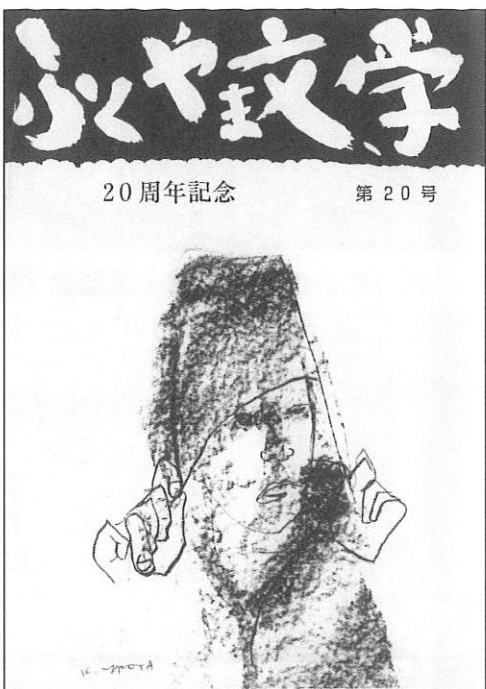
こうした崖っぷちの状況から立ち上げたのが「ふくやま文学」でした。当初は小説、児童文学、詩の三部門で、中でも児童文学は皿海達哉氏という中堅作家に支えられて活気づきましたが、身辺の事情で皿海氏が退場されてからは児童文学の書

き手もやめていき、代わりに小説部門が元気になりました。

書きたい、自分の思いを今に留めたい、伝えたいの願いを想像力に託して試行錯誤を重ねながら、小説修行が始まりました。同人の溢れる思いが凝縮された創刊号を手にしたときの感激、誰彼を問わずに見せて誇りたいような気持ち、このあとも決して忘れることはありません。

勉強の方法としては、毎月一回部門ごとに学習会を持ちます。小説では、テーマを決めて五枚程度の短編を書きます。モチーフは「待合室」「穴」などの名詞や「走る」「落ちる」の動詞、或いは場面設定をしての状況からイメージを膨らませるというやりかたです。この方法は伝習所で井上光晴氏の授業から学んだもので、想像力を鍛えるのが目的でした。このようにして書き溜めた短編は結構な量になるので、時々手作りの短編集を作っています。

振り返ると、二十年という年月はやはり永い日々でした。この間には、亡くなった人、連れ合いの転勤や引越して抜けていった友、珍しく若者



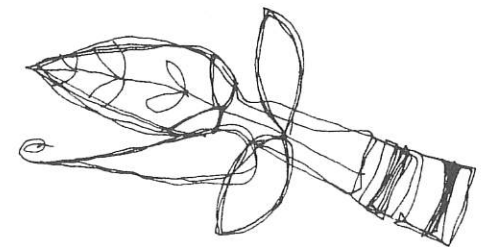
が入ってきたので喜んでいて、思いが違つて去っていく。その度に大小の摩擦を繰り返して、存続の危機に及ぶこともありましたが、書き続けたい一念で支えあい窮地を脱しました。
毎年三月一日が発行日。その日、手分けして本屋に並べます。店の人に「平積みにして下さい」と頼むことにもようやく慣れました。ある程度の期間が過ぎると回収するのですが、どつと返本の時や、売り切れて追加の連絡がある時もあり、文字通り一喜一憂です。
なりゆきで、「ふくやま文学」は一度も広告を取ったことがありません。同人が印刷費を出し合つて発行を続けてきましたが、近年は投稿が増えたので、貧乏所帯のやりくりも少しは楽になりました。しかし、本屋に置かせてもらうのは資金調達のためばかりではなく、見も知らぬ誰かに向けて文学の心を発信したいからなんです。売値は印刷代の半分にも満たぬ額ですが、本が売れると、

誰かが読んでくれて、その人の心に何かを訴え、考えてもらえるはず、と思うだけで嬉しいのです。ちょうど真ん中の10号を過ぎた頃から他の同人誌と交流を始めました。前橋の「クレーン」、九州佐賀の「佐賀文学」など、どれも文学伝習所の仲間で、「ふくやま文学」より先輩誌です。誌の遣り取りだけでなく、作品の投稿や合評会にも参加します。これはいい試みだったと思います。地方同人誌に、その地に根付く言葉や匂いが濃く伴うのは当然で、固有の土壌の賜物ともいえます。う。ですが、それが文学の視野を狭くし想像力をマンネリ化させるのを怖れます。「クレーン」や「佐賀文学」と交流したことで、未知の刺激を呼び込み、作品世界を広げる事ができたと思っています。つい先ごろも「クレーン29号」の合評会が東京池袋であり、「ふくやま文学」から三人が参加しました。遠隔の地ですから、参加に時間と費用が掛かるけれど、仲間内とは異なる激しいやり取りや熱気に触れ、更に大きな未知の課題を抱えて帰ってきました。20号の「あとがき」は、過去現在未来へ通じる仲間の思いを吐露したものです。

（同人 大河内喜美子）



2008年4月、20号合評会にて



福山文学
〒721-0974
福山市東深津町六・三・五八
中山茅集子
☎084-922-5864

あなたも選考に参加してください

8月9日

全国同人雑誌最優秀賞

「まほろば賞」公開選考会

あなたも選ぶ、新しい時代の、新しい文学賞

●全国同人雑誌振興会・文芸思潮では、全国同人雑誌最優秀賞「まほろば賞」を公開選考会にて決定します。公開による方法ですので、どなたでもご参加できます。

●候補作品はこれまで文芸思潮に同人雑誌優秀作として掲載された作品です。

文芸思潮 23号「セラピープロジェクト」(木戸順子「弦」82号)

「海辺の家」(近藤勲公「日田文学」53号)

文芸思潮 24号「それぞれの深紅」(遠野明子「槐」25号)

「賀状」(鈴木信一「文芸東北」502号)

「蜘蛛の部屋」(谷口葉子「カプリチオ」26号)

「風景——イヌイットの皮袋——」(山口馨「渤海」54号)

「魚の時間」(中山茅集子「ふくやま文学」20号)

合計6作品です。

●選考会は8月9日(土曜日)に青梅の文芸思潮夏期文芸合宿会場「かんぼの宿青梅」で午後2時半より開かれます。郵送による投票だけでも参加が可能です。

どうぞあなたも選考委員になって最優秀賞を選んでください。

選考委員ご希望の方は全国同人雑誌最優秀賞選考委員申込書を文芸思潮に投票用紙とともにご請求ください。

選考委員申し込みの方に掲載号(有料)をお送りします。

文芸思潮の定期購読者は、候補作品を読んでいたければそのまま選考委員になれます。お申し込みだけで、文書選考委員となることができます。詳しくは次ページをご覧ください。

●この合宿および選考会の収益はまほろば賞賞金・記念品・賞状などの費用に充てられます。選考会のみ参加も可能です。

●夏期合宿などの詳細は文芸思潮全国同人雑誌係まで参加要領をご請求ください。

全国同人雑誌振興会
文芸思潮

文芸思潮 〒158-0083 東京都世田谷区奥沢7-15-13 TEL&FAX03-5706-7848

Mail: asiawave@qk9.so-net.ne.jp

全国同人雑誌最優秀賞まほろば賞の創設 および公開選考会について

●全国同人雑誌最優秀賞

全国同人雑誌振興会および作家集団「塊」KAI、文芸思潮では、日本および世界の日本語表現による文芸同人雑誌の顕彰と賞揚を行ない、各同人雑誌と提携して、文芸同人雑誌および小説創作活動の振興を図りたいと思います。この目的のため、全国同人雑誌最優秀賞を創設します。

これにより優れた作品が文芸を愛する人々に広く読まれる運動を展開していきたいと存じます。よろしく御理解、御支援、御協力のほどをお願い申し上げます。

またこの最優秀賞の名前を公募によりまほろば賞と決定いたしました。本年よりまほろば賞といたします。

●全国同人雑誌最優秀賞の選考過程については以下の通りです。

- ① 全国同人雑誌振興会選考委員会および文芸思潮編集部により、同人雑誌に掲載された作品(3年以内)のなかから優秀賞を選び、文芸思潮に掲載する。これに同人雑誌賞優秀賞を贈り、同時に最優秀賞選考の候補作品とする。優秀賞は6篇前後とする。優秀賞には賞金1万円と賞状・記念メダルを贈る。
- ② 毎年夏に特別選考委員と一般選考委員とが集まり、公開の下に候補作品について十分な討議・討論を重ねたのち、投票により、最優秀賞を決定する。全国および海外からの送付による投票も点数に加える。
- ③ 選考委員は候補作全作品を読んだ者とする。
- ④ 選考委員は特別選考委員と一般選考委員(選考会参加)、および文書選考委員(選考会不参加/文書のみ)によって構成される。一般選考委員、および文書選考委員は希望志願とする。
- ⑤ 各委員投票持点は特別選考委員50点、一般選考委員10点、文書選考委員は3点とする。一般選考委員、および文書選考委員の人数枠は第3回まで設けない。
- ⑥ 文書選考委員の投票は公開選考会一週間前に行い、選考会当日までに開票集計を明らかにする。
- ⑦ 最優秀賞は一人が原則だが、同水準の場合は二人もありうる。
- ⑧ 最優秀賞には第2回は10万円の賞金と、賞状、記念トロフィーを贈る。(賞金は、できるだけ有志の寄付を募り、その寄付金によって、将来賞金額を上げていくことが望まれる)
- ⑨ 2008年度の特別選考委員は、作家集団「塊」KAIメンバー、八覚正夫・小沢美智恵・大高雅博・五十嵐勉・小浜清志および森啓夫、三田村博史、三神弘とするが、さらに加わる場合もある。
- ⑩ 最優秀賞選考過程は「文芸思潮」に発表する。

●この賞を継続することによって、同人雑誌による文芸創作活動の奨励を図りたいと思います。つきましては、優れた作品を御推薦いただき、また皆様の発行されている同人雑誌をぜひ文芸思潮および全国同人雑誌振興会にお送りくださいますよう、心からお願い申し上げます。

●この全国同人雑誌賞は、多くの方に参加していただき、その賛同と御協力によって運営されていく新しい賞です。ぜひ同人雑誌からの文芸復興をめざして奮って御参加いただきたいと切にお願いするしだいです。

2008年6月20日

全国同人雑誌振興会
作家集団「塊」KAI
文芸思潮

夏期合宿 & 第2回全国同人雑誌最優秀賞まほろば賞公開選考会

夏期文芸合宿 文芸思潮

夏期合宿係公開夏期文芸合宿に参加してあなたの手で最優秀賞を選んで下さい。

文芸思潮では、この夏8月9日・10日に吉川英治ゆかりの奥多摩・青梅で夏期文芸合宿を行い、そのなかで、全国同人雑誌最優秀賞を徹底的に話し合った末、投票で決定いたします。また文芸講演会もあります。こころゆくまで文学を語り合い、文芸の時空を楽しみませんか。

作家集団「塊」メンバー・作家
三神弘氏(すばる文学賞)参加
1泊2食付 25000円
どうぞご参加ください。

●お問合せ・お申し込みは下記へ

文芸思潮 〒158-0083 東京都世田谷区奥沢
7-15-13 TEL&FAX 03-5706-7848

Mail: asiawave@qk9.so-net.ne.jp

8月9日・10日

青梅夏期文芸合宿

奥多摩青梅「かんぼの宿青梅」
8月9日10時青梅線「青梅」駅ホーム集合(直接会場へは午後1時)
吉川英治記念館見学(希望者)
文芸講演会/三神弘「地方から世界へ」
全国同人雑誌最優秀賞公開選考会
懇親会
小説作法勉強会 & フリートークキング

第2回全国同人雑誌最優秀賞投票用紙

⑦	⑥	⑤	④	③	②	①	番号 短評
「魚の時間」中山茅集子 「ふくやま文学」20号 文芸思潮24号	「風景」イヌイットの皮袋 「渤海」54号 文芸思潮24号 山口馨	「蜘蛛の部屋」谷口葉子 「カブリチオ」26号 文芸思潮24号	「賀状」鈴木信一 「文芸東北」502号 文芸思潮24号	「槐」25号 文芸思潮24号 遠野明子	「海辺の家」近藤勲公 「日田文学」53号 文芸思潮23号	「セラピープロジェクト」木戸順子 「弦」82号 文芸思潮23号	
点	点	点	点	点	点	点	点数
持ち点	選考委員名	住所 〒	TEL				文芸思潮会員の場 合は会員番号を、非 会員の場場合は×を記 入してください。 No.

※点数は持ち点の中から合計最大が持ち点となるようにつけてください。
一人に限らなくてもけっこうです。

※批評文がたくさんになる場合は
拡大コピーを取ってご記入くださ
い。

※当日参加できず、郵送などによる投票の場合はこの投票用紙またはコピーにご記入の
上8月1日までに文芸思潮・全国同人雑誌最優秀賞選考委員会宛にお送りください。